

平成 18 年度文部科学省委託研究

「今後の人文・社会科学系分野教育の在り方に関する調査研究」

報告書

2007 年 5 月

## 目 次

まえがき .....	1
総 括 .....	3
3 大学（北京大学・ソウル大学校・東京大学）人文学関係部局長会議 .....	6
イエール大学／東京大学人文学教育推進セミナー .....	10
海外諸大学の現況 .....	32
ソウル大学 .....	33
北京大学.....	42
オックスフォード大学.....	51
ケンブリッジ大学.....	57
ダラム大学.....	63
エディンバラ大学.....	67
イエール大学.....	71
ハーバード大学.....	76

## まえがき

人文・社会科学分野の教育研究は、恒常的な資金配分が減少し、競争的資金の活用が当然視されるようになった現在、必ずしも恵まれた環境にあるとは言いがたい。大きな理由は、この分野の教育研究は何より継続性が大きな意味を持ち、比較的短期間に設定されるプロジェクト型になじまないという点にある。しかしながら、社会的要請及び社会への説明責任を考えると、旧来の教育研究体制に安住しては行かないことは間違いない。人文・社会科学分野の教育研究を活性化させるための有効な方策——例えば魅力あるカリキュラム改革、奨学金を含む資金の導入の仕方——を探ることが急務である。同時に、人文・社会科学分野のディシプリンに内在する問題も意識せざるを得ない。それは、多文化の共存が緊急の課題となっている現代世界にあって、多様な言語、歴史、文化を探求する人文社会科学はその重要性が増しているにもかかわらず、自然科学と比べて短期的な社会還元の結果が不分明になっており、グローバル・スタンダードの設定が難しいという点である。そのため、教育研究の意義が社会的に十分に認知されているとは言いがたく、またグローバル化という時代の趨勢と齟齬をきたしている面があり、結果として、学生・院生・若手研究者を養成する教育基盤の脆弱化を招きかねない事態に立ち至っている。

以上のような現況を踏まえ、とくに自然科学分野とは異質のディシプリンとしての特性を持つ人文学教育に焦点を当て、海外の大学において ①当該分野の教育がいかなる環境に置かれているかの調査、②いくつかの専門分野のカリキュラムの比較分析、を行い、あわせて、③当該分野の中でもとくにグローバル化が難しいと考えられるいわゆる「日本研究・日本学」（日本思想、日本史、日本文学など）分野に注目して、海外の研究者との協働作業、海外発信の可能性を探ることとした。それが、今後の人文学・社会科学教育の充実・発展のひとつのモデルケースを提供すると考えられるためである。

本調査研究の柱となるのは、人文学教育の現状（および将来の展望、展開）に関して行われた

- ① 北京大学、ソウル大学校の人文学関連学部部長との意見交換
- ② 九州大学文学部長との意見交換
- ③ イェール大学人文学関係者とのセミナーおよび意見交換
- ④ 北京大学、ソウル大学校、連合王国のオックスフォード大学、ケンブリッジ

大学、ダラム大学、エディンバラ大学、米国のイエール大学、ハーバード大学の人文学関連学科のカリキュラム調査

である。なお④にあつては、学部学科構成が大学によって大幅に異なるため、日本の人文学教育において一般的であり、なおかつ、国・地域の特異性に比較的影響されにくいと思われる教育研究分野として、「美術史」「宗教学」「言語学」を中心に調査した。ただし、当然ながら、カリキュラムにも大学の独自性が反映されており、こうしたディシプリン区分はあくまで当方の都合による便宜的なものであるため、適宜、隣接学科目を参照したことをお断りしておく。

東京大学平成 17, 18 年度文学部長  
高橋 和久

## 総 括

高橋 和久

本研究の結果、明らかなになったことは、半ば予想されたこととはいえ、社会的諸条件の差異が人文学教育の現状に大きな違いをもたらしているということである。具体的な問題とそれに対するコメントは以下に記されるそれぞれの項目に詳しいが、今後、日本において真に人文学・社会科学教育の充実・発展が図らねばならないとしたら、社会的環境の整備が一番根底にある課題であると考えられる。ここで言う社会的環境には、当然ながら、人文学に対する社会的認知が大きな要素となる。より品のない言い方をすれば、文化基盤としての、或いは成熟した市民性の基盤としての人文学への社会の理解が高まらない限り、人文学（及び社会科学）教育の充実・発展はあり得ないだろうということである。科学技術の発展に支えられた文明の進化に伴うほど、人間は進化しているのかどうか。もちろん答は「否」であって、そうでなければ日本社会がこれほどの憂いと不安に満ちているはずがない。複眼性の欠如、他者への謙虚なまなざしの欠如は単に道德教育を導入すれば解決されるといった問題ではないし、またそうした解決が可能であるとする浅薄な思想が蔓延する社会は、成熟した市民社会から程遠いものであろう。

この点については、はしたないことに、別のところで駄弁を弄して述べたことがある（東京大学『学内広報』No. 1335 参照）ので、ここでは繰り返さないが、しかし、人間が憎悪や悪意や嫉妬といった負の感情から自由な生物として生まれるまでに進化を遂げた時代が来るまでは、それをいかにして多少とも馴致するかを学んだ方が本人にとって楽なばかりでなく、市民社会にとっても好ましいことであるのは、当たり前すぎて口にするのも恥ずかしい事実であり、ふと立ち止まって考えてみれば、そこにおいて人文学教育の果たすべき根本的な役割は自明のものとなる。欧米の大学は、或いは、大学教育に何を期待するかについての欧米社会の基本的理解この自明性を自明のものとして保持しているように思われる。ところが生憎、日本においてはそうではない、というのは言いすぎであろうか。恥ずかしいことは避けて通るのが人の常らしく、どうやら日本の先輩人文学研究者もその例外ではなかったらしい。恥ずかしいので口にしないうちに、人文学教育の役割の自明性が希薄になってしまったというのが日本社会の現状であると判断されるのである。以下のコメントにもあるように、われわれとしては自らの美意識を棚上げし、恥ずかしい発言や行動をしなくてはならない事態を迎えているのかもしれない。

そうした発言や行動がどのようなものであるか、あるべきかについては以下の報告に委ねることにすれば、本委託研究の「総括」は事実上、これで終わることができる。終わることができるのだから当然終わるわけだが、以下の報告と関連させつつ、しかし、できるだけ重複しないように意識しつつ、この場を借りて、稲田俊明九州大学文学部長との意見

交換の報告を簡単にしておく。両者間で主として日本における人文学教育の現状と展望について、忌憚のない意見交換をしたが、そこで話題となった主なトピックは

- ① 学生選抜方法
- ② 学科・専修課程別学生数
- ③ 専修課程の独立性・課程間の壁
- ④ 学部共通授業
- ⑤ 他学部へ向けた授業・全学共通科目
- ⑥ 教養教育との関係
- ⑦ 社会的要請への対応・卒業後の進路との関連

である。

その結果、共通認識として明らかになったのは、これも要約的に箇条書きすれば

- ① 現行の入試方法、進学制度の如何にかかわらず、学生の関心が全体として人文学から離れてきている。
- ② 上記の現象は日本社会における大学の位置づけと密接な関係があり、高校から大学へという直線的、単線的な教育体制が支配的な現状のままでは、この趨勢が近い将来に変化することは想像しにくい。
- ③ 同時に、いわゆる社会人になってから人文学の素養の欠如、人文学への関心が自覚される場合が少なくないように見受けられるのであり、現在の学生定員を柔軟に運用し、例えば社会人入学制度や3年次からの学士入学制度が正規の入進学ルートとして、すなわち、複線型の高等教育システムの定着することが望ましい。
- ④ 大学内外において人文学サイドからの発言力が低下しており、ややもすると、現実に対応するかが最重要課題となり、批判的視点が確保されにくい状況が生まれているのではないか。これは大学の理念を考えると、きわめて憂慮すべき事態である。
- ⑤ 次世代の研究者養成という固有の人文学ディシプリンとして行う教育の重要性と、他の領域（具体的には、他の学科、他の学部の学生）に開かれた、具体的には全学に向けた学部学科共通授業といったものを担う人文学教育の重要性という相反する方向をいかに調和させるか、換言すれば、扉は閉めて窓は開けてというシステムをどう構築するかが問題である。
- ⑥ 前項の后者の問題は、いわゆる大学前期課程教育が何を担うかという問題と切り離すことができず、たとえば、前期課程での外国語教育を道具としての英語という側面からのみ捉え、後期専門課程での専門教育を効率よく進めるための準備教育と位置づけることは、人文学の理念に反するのであり、ひいては日本社会の基盤を揺るがし、文化の脆弱化を招くことになる。
- ⑦ 大学は職業教育の場ではないという欧米では当然の認識が日本社会には成立していない。これは日本の大学制度の設計がヨーロッパ（とくにドイツ）型の理念にアメリカのリベラル・アーツ教育の理念を接木したものであることと無関係ではないだろう。今後は、成熟した市民社会へ向けて、どのレベルでどのような職業教育を行うのか

を再考する必要があるのではないか。同時に、人文学の研究教育がいわゆる理系の学問とは違った形で社会や文化に貢献していることを積極的に明示する必要がある。たとえばこれまで、「翻訳」はいわゆる学問業績に数えられないが、外国文学を含む諸言語文献の翻訳が果たしてきた／今後果たすであろう役割は日本文化にとって無視できないはずである。

大略、以上のような点を話しあったが、そのなかで話題に出た、文部科学省の助成を得て九州大学文学部を中心に取り組んだ「文学部の学部共通教育に関する研究・開発プロジェクト」の成果（九州大学出版会から刊行されている）や、東京大学文学部が行っている「応用倫理倫理教育プログラム」、また、まだ青写真前の段階にあるとはいえ、東京大学が構想しつつある理科系の一部を巻き込んだ文科系中心の新研究組織構想など、新しい動きが皆無というわけではないのだから、シニシズムに陥ることなく少しでも光が見える方向を見ていこうという痩せ我慢かもしれない姿勢を相互に確認し、励ましあうことができたのが何よりの収穫であった。

韓国では2006年9月、全国80あまりの人文学部の部局長名で「無差別的な市場論理による人文学の存立根拠の脅威への警告、人文学の活性化のための具体策の模索、人文学研究及び教育への支援拡大」などを盛り込んだ声明が発表されたと聞く。実際、9月21日の『朝鮮日報』社説には「人文学者が主張しているように、実用的な学問に偏った支援態勢を改め、人文学の領域もまんべんなく支援する改善策を直ちに実行すべきである」と述べられているようである。安易な比較、同一視は慎まなければならないが、欧米と比べて人文学を基盤とするという大学理念の成立していないアジアの有力大学が今後どのように発展していくべきか、対症療法にとどまらない根源的な高等教育の見直しが必要であるように思われる。ただし慌てて付言すれば、北京大学やソウル大学と比べて、東京大学の日本学分野の教育研究者の数の少なさは、いかにも象徴的ではあるまいか。何を象徴するか、考え方は人によって異なるかもしれないが、わたしの考えていることは恥ずかしくてとてもことばにはできないけれども。

### 3 大学（北京大学・ソウル大学校・東京大学）

#### 人文学関係学部長会談

丸井 浩

本委託業務の大きな柱の一つとして、今後の人文学・社会科学教育の充実・発展への展望を開くために、海外主要大学の人文学諸分野の教育現況の調査や比較分析を行うという課題を掲げ、具体的な調査対象に関しては、欧米を代表する大学としてハーバード大学、ケンブリッジ大学及びオクスフォード大学を取り上げたのに対して、アジアの大学としては同じ漢字文化圏に属している中国と韓国に注目して、両国をそれぞれ文字通り代表する北京大学とソウル大学校を調査対象として選定した。

折しも昨年秋頃から、北京大学とソウル大学と東京大学の人文学系部局相互の学術交流をさらに拡大・深化させてゆくための具体的なプログラムを、部局長レベルの合意のもとで強力に推進するための話し合いが始まっており、このたびの調査研究は、そうした三大学人文学交流プログラム<sup>1</sup>の立ち上げ作業と並行させ、あるいは組みこむ形で進められることとなった。

以下に、その調査経過と調査結果の概要を箇条書き風に記す。

1. 本委託業務は本年1月4日からスタートしたが、1月30日～2月1日にはソウル大学校人文大学（人文学部に相当）に丸井が出張して、人文大学学長の YI Tae-Jin（李泰鎮）教授や現象学研究者として世界的に著名な LEE Nam-In 教授などから、ソウル大学校人文大学の教育体制や、人文学研究と教育の現状、問題点などについて聞き取り調査を行い、かつ組織概要や専門ごとの教育カリキュラムなどをまとめた資料の提供を受けた。なおこの滞在期間中は、PESETO 人文学会議発足のために第1回準備会議も行われており（脚注①を参照のこと）、同会議に北京大学人文学部を代表して参加していた北京大學校務委員会副主任（副学長相当）で哲学専攻の楊河（YANG He）教授ならびに西洋史専攻の彭小瑜（PENG Xiaoyu）教授に、北京大学における人文学教育の現状等について若干の情報提供を受けたほか、教育体制や授業カタログのような資料の提供を求めることができた（ただし同資料は実際には3月になってから提供を受けた）。

<sup>1</sup>具体的なプログラムとして、「PESETO 人文学会議」（途中で“BESETO”から“PESETO”に変更）の発足と具体的な活動企画の策定に向けて、第1回準備会議が1月30日～2月1日にソウル大学校人文大学において、第2回準備会議が3月28日～29日に東京大学文学部において開催された。なお“PESETO”とは Peking Univ. の PE, Seoul Univ. の SE, および Tokyo Univ. の TO を一つに繋いだものであり、この2回の準備会議には三大学の人文学系部局の執行部がそれぞれ準備委員として加わり、東京大学文学部からは丸井浩副研究科長、韓国史を専門とする吉田光男教授などが準備会議に参加した。

2. 第2回目の聞き取り調査は、3月27日～29日において東京大学文学部において行われた。前回のヒアリング同様、PESETO 人文学会議準備委員会の開催期間に合わせて聞き取り調査を織り込んだ形であるが、ソウル大学校人文大学からは前回同様、李泰鎮学長と中国文学専攻の李康斉 (LEE Kang-Jae) 教授が、北京大学からは楊河 (YANG He) 教授のほか中国近代史研究者として著名な牛大勇 (NIU Dayong) 教授が訪日、彼らに対して前回よりも踏み込んだ聞き取りを行った。
3. 以上のヒアリング調査とは別に、ソウル大学と北京大学からそれぞれ提供された冊子等の資料を適宜、関係者に質問しつつ内容確認を行った上で (ただし内容確認のための十分な質疑応答はできなかった)、重要箇所を翻訳を行い検討を重ねて、それをまとめたものを本報告書の中に掲載した。まず人文学系部局に相当する組織が、両大学全体の中でそれぞれどのような位置を占めているかといった組織上、外形上の特質を簡単にまとめておく。(教育内容の具体的な点は4を参照)
  - (1) まずイギリスのカレッジ制が採用されている韓国において「大学」(college)は、総合大学においては学部に対応し、したがって「人文大学」(College of Humanities)とは日本でいうところの「人文学部」に相当する組織であることを確認した上で、ソウル大学人文大学の内部組織(学科編成)、教員スタッフの規模を見ると、東京大学との対応で言えば、文学部と教養学部教養課程を合わせた形の部局であるということが出来る。ただし文学部に含まれる「行動思想文化系」の専門分野(社会学、心理学、社会心理学)は、人文大学とは別の「社会科学大学」に政治学や経済学などとともに含まれている点は大きな違いである。また思想系の学科ないし思想系の分野を含む学科も全15学科中3つのみであり(哲学科・宗教学科・美学科)、倫理学や中国思想文化学、インド哲学仏教学、イスラム学といった分野は、独立の学科を形成しておらず、全体的には語学・文学系が中心である点も、顕著な違いとして注目される。
  - (2) 一方、北京大学については「人文学部」なる組織が、社会科学部、理学部、情報・工学部、医学部と並ぶ形で立てられており、一見、文学部に相当する部局であるかの印象を得るが、そもそも規模から見て、この場合の「学部」はむしろ一つの大学と呼んだほうがよく、「学部」を構成する「系」や「学院」の多くが、我々の大学でいうところの「学部」(ないし「研究科」)あるいは「学科」(ないし「専攻」)に相当すると言ってよい。例えば人文学部の中の「外国語学院」は、教員数だけで146名、学生数も1,174名に上る。規模の問題ばかりでなく、これは聞き取りの中で明らかになった点であるが、人文学部長という存在は、実質的にはほとんど権限を持たず、たとえば財務的な権限を掌握しているのはむしろ、「校部行政機関」の中の「社会科学部」部長であり、さらにそのトップに「校務委員会」の担当副主任が位置するというのが実態のようである。「中国語文学系」「歴史学系」「外国語学院」といった組織がむしろ独立性の強い部局をなし、そのゆるやかな連合が「人文学部」として最近になって括られるようになった模様である。なお社会学や心理学は、人文学部とは別の

組織に属している点は、ソウル大学校と同様である。

4. 人文学系部局内部の教育体制の実質的内容については、本委託業務期間が短かったこともあり、さしあたり全体的な学科構成の特徴を見渡せるような情報（学科名称、教員数など）を纏めることが中心となった。ただし部分的には細部のデータ分析に踏み込んでいる。

(1) ソウル大学校人文大学は15の学科から成るが、各学科によって開講される授業科目は、専攻探索教科目と学部専攻科目に大別される。前者は教養課程での科目であり、後者がいわゆる各学科の専門科目になっている。すでに3の(1)でも触れたように全体的には語学・文学の学科が支配的である。特に欧米系の言語・文学関係の教員は多いが、これは教養課程でこれらの入門的な授業が多く開講され、その担当教員を人文大学が擁していることと関係しているであろう。具体的には、英語・英文学（実質的には英米文学）、独語・独文学、仏語・仏文学、露語・露文学、西語・西文学（東大文学部では南欧語・南欧文学がこれに対応するが、ただし西語・西文学のスタッフはまだいない。）の教員数は合計で61名であり、全体の教員数166名の約37%にも達する（東大文学部では21名で全体の17.5%）。これに比して思想系の3学科は29名で、その半分に満たない（東大文学部では120名中の27名）。ちなみに、東京大学文学部の「インド哲学仏教学専修課程」（ソウル人文大学の「〇〇学科」に相当するのが「〇〇専修課程」）で開講している科目に相当するものを拾ってみれば、「13. 哲学科」では教養課程段階で「中国とインドの哲学」、専門科目としては「仏教と禅」のほかは「東西比較哲学」があるのみである。このほかは、「14. 宗教学科」では教養課程段階で、「キリスト教概論」と並んで「仏教概論」があるほか、専門科目としては「インド宗教」と「韓国仏教」が含まれている。しかしインド哲学宗教文献の最重要言語であるサンスクリット語文法を講じ、あるいはサンスクリット語文献の講読を行う科目は見当たらない。

(2) 北京大学の人文学部という組織の性格についてはすでに触れたが、全体としてはいわゆる「哲・史・文」の枠組みで構成されている。「哲学系」は「1914年創立」「別名中国哲学門」という記述から察するに、元来儒教教育・研究を中心とする内容ではなかったかと推測される。また1995年には「宗教学が哲学や論理学と並立する専攻から独立し、宗教学系として発足」とあるが、「哲学系・宗教学系」というように中黒をはさんで併記されており、なお両者の関係は微妙と思われる。組織の専攻単位で、哲学が二つ顔を出しており、後者の哲学は括弧書きで「科学技術哲学と論理学」と付記されている。下部組織として複数の「研究室」が並んでいるのは興味深い。すなわち、「マルクス主義哲学研究室」「中国哲学研究室」「外国哲学研究室」「論理学研究室」「倫理学研究室」「美学研究室」「科学技術哲学研究室」「仏教・道教研究室」および「キリスト教・宗教学原理研究室」と9つの「研究室」が連なっている。授業科目一覧の中に登場する「〇〇類」は、この「〇〇研究室」とほぼ対応する括りであり、

ちなみに「外国哲学類」のもとに掲げられている科目の中には、西洋の古代・中世・近代・現代哲学関連のさまざまな授業科目のほか、「韓国哲学」「日本哲学」「アラビア哲学」と並んで「インド哲学」「インド哲学原著選読」も含まれており、サンスクリット語原典の講読ゼミが行われている。

5. 聞き取り調査を兼ねた三大学人文学研究者代表者の会合の中で、話題に上ったテーマの一つに「人文学の危機」があった。科学技術の発展やコモディティの隆盛といった時代思潮の中で、若者たちが実学志向を強め、あるいは資格取得のための大学教育を求める傾向が強まるなか、じっくりと外国語や古典語を学び、難解なテキストを解読したり、自国や他国の文化、歴史の真相を客観的な史料分析を踏まえつつ、掘り起こそうとする作業や、自分でじっくりと物事を考え、感じ取り、その思考の蘊と感情の機微を、他者へと正しく適格な言葉で伝えることに内在する意味を、時空を超えてひたすらに追い求める学的営みの価値は、次第に忘れ去れつつあるのではないか、人文学の存在価値をもっと社会に対して強く訴えなければ、営利活動との結びつきが害して密接でなく、明示的でない人文系諸学問は衰退していくのではないか、という危機意識が、三大学間にどの程度、共通するものなのか、若干話し合う機会があった。しかし、東京大学とソウル大学ではこうした危機意識は相当に近いものがある一方で、その議論に参加した北京大学の教授は、この問題意識そのものを共感を示さず、北京大学において「人文学の危機」は存在しない、という発言がなされたのは印象的であった。
6. このほか将来に向けて、三大学の人文学系部局（この「部局」という言葉・概念によく対応する中国語も韓国語も存在しないようであったが）が、どのようなテーマのもとに学術交流を深めることができるのか、という話題にも及んだ。欧米を強く意識し、今後は東アジアの人文学の意義を大きく見直して、その価値を広く世界に訴えるべきだという、ややナショナリスティックな響きを帯びた主張表明もなされたが、その一方では、同じく欧米の言語・文化・歴史・思想・文学などを対象としながら、三大学の研究者の間には、それぞれ何らかの色合いの違いが認められるのではないか、そうした違いの基をたどることで、相互の文化伝統の違いなどが浮かび上がるとするならば、そのような出会い、対話を可能とする学術交流にも大きな意義が見られるのではないか、という意見も出された。

# イェール大学／東京大学

## 人文学教育推進セミナー

上記セミナーは次のような形で2007年3月15日(木) 東京大学文学部法文2号館1番大教室で開催された(同時通訳付き)。

\*\*\*\*\*

挨拶： 佐藤慎一

東京大学理事・副学長

報告者：小松久男

東京大学大学院人文社会系研究科教授(副研究科長)

George Joseph

Assistant Secretary of Yale University

Christopher Hill

Assistant Professor of East Asian Language and Literature

Aaron Gerow

Assistant Professor of Film Studies and East Asian Language  
and Literature

Ellen Hammond

Curator of East Asia Library

コメンテーター： 高山 博 東京大学大学院人文社会系研究科教授

司会： 高橋和久 東京大学大学院人文社会系教授(研究科長)

全体統括：藤原克己 東京大学大学院人文社会系研究科教授

\*\*\*\*\*

以下にこのセミナーでの議論を要約して報告する。

## 日本における人文学の危機について

小松久男

私は東洋史学研究室に所属している。長い歴史を持つ東洋史学も近年、進学してくる学生が激減しており、いわば斜陽産業に身を置いているともいえるので、今回の話をするにはたいへんふさわしいのかもしれない。

日本における人文学の現状について、私は以下の三者との関係で考えてみたい。

1. 大学本体と学外の教育行政機関
2. 学生・院生
3. 社会

まず、第一の「大学本体と学外の教育行政機関」について。私たち文学部に身を置く者が、つね日頃感じていることの一つに、人文学に向けられる疑いの目、あるいは冷たい視線というものがある。文学部の学問について、それは実用的な役に立たない虚学であって、実学よりもはるかに劣るものだという議論は、昔からずっとあったと記憶している。これに対して、文学部の学問は、財布は豊かにしないけれども、心を豊かにするものだという応答もありえた。しかし、そうした答え方も、もはや通用しなくなっているように思われる。それほど近年では、効率性や有用性ということが厳しく問われる世の中になっており、文学部の学問に対して、いよいよ冷たい視線が向けられるようになっているのである。

より具体的に言えば、理工系に比べて評価のシステムがないのではないかと、博士の学位がなかなか授与されず、数も少ない、国際化の面で立ち遅れているのではないかと、競争的資金の獲得に消極的である、などのことが、しばしば指摘されるわけである。しかしながら、こうした評価は、基本的に理系の論理が軸になっており、かつその前提にあるのは、おそらくアメリカン・スタンダードなるものだろう。そこで一つ指摘しておきたいのは、イエール大学をはじめとして、アメリカの伝統ある大学では、人文学の伝統がきわめて健全なかたちで存在しているということである。こうした点を、私たちはもっと見直して見る必要があるのではないだろうか。

これまで文学部の人間は、実は一種の誇りもこめて、どうせ私たちのやっていることは虚学なのだと思いついてきたところがあった。しかし、これからはもっと自分たちの学問の正当性や存在意義といったものを、あえて主張してゆかなければならない状況に、いま私たちは立たされているのではないだろうか。その時、私たちが一つの範とすべきものとして、先ほど述べたような、アメリカの大学における人文学のあり方があると思う。はたしてアメリカでは、とくにイエール大学においては、日本の人文学が直面しているような状況はないのだろうか、ぜひうかがいたい。

次に、第二の「学生・院生」について。最近、学生の文学部離れ、あるいは人文学に対

する関心の低下という傾向が顕著になってきている。東京大学文学部のみならず、日本の多くの大学の人文系学部・大学院で学生の減少傾向が目立っているという。私の属する東洋史学科でも、今年の進学者は、定員 25 名に対してわずか 4 名であった。大学院、とりわけ修士課程においても、こういう傾向はじわじわとおし寄せてきている。

こうした現状の背景には、社会全体の価値観の変化や経済的事情といったものがあるだろうし、また日本の多くの大学で教養教育を放棄あるいは削減してしまったことの影響もあるのかもしれない。

人文学への関心が低下しているように見受けられる今日、これまでのような「去る者は追わず、来る者は拒まず」といった‘待ち’のスタンスでよいのかということが、厳しく問われているのであり、研究面でも、伝統の枠組みの中で細分化した個別研究に埋没することなく、語るに足る研究をおしひろげてゆく必要があるだろう。

学生について言えば、とくに深刻なのはポスト・ドクターの問題である。苦心の末に業績を積み重ね、優れた博士論文を書いても、なかなか就職の機会がない。このままでは若い人たちがはじめから人文学を敬遠するようになり、学生の減少傾向が一種の悪循環に陥ってしまう怖れがある。

また、十数年前に東京大学をはじめ多くの大学では大学院重点化が推進されたが、その後、基礎にあたる学部教育の方はどれほど充実したのか、これも見直す必要もある。

イェール大学ではこのような問題はないのだろうか。この点についてもうかがいたい。

第三として、人文学と、より広い社会との関係についてふれておこう。

一般社会における人文学に対する需要といえは、それはまず本ということになるだろう。最近では、人文学の本がなかなか売れなくなった、専門書になると 1,000 部売れたらよい方で、しかも再版にまで至らない、といった話をよく聞く。しかしながら、一方では、人文学の本は奮闘しているという説もある。昨年秋のホーム・カミング・デーの折、かつて東京大学文学部長を務められた柴田翔氏が、まさにこの教室で講演をされ、こう言われたことがある。今日新書版の本が次々と刊行されているが、そうしたなかで読んで心に残る本の多くは、人文学の学者が書いたものだ、こういう点にも人文学の存在理由を見出してがんばってほしい、と。学部長時代にやはり第一の点で苦勞された柴田氏からの激励の言葉である。

また、日本の人文学の特筆すべき点として、翻訳文化の豊かさも指摘することができると思う。この点に関して、最近ある雑誌でとても興味深い話を読んだので、紹介しておきたい。岩波文庫の一冊に、デカルトの『方法序説』がある。これは 1953 年に出版されたが、爾来今に至るまで、毎年 1 万部売れているのだという。通算すれば何十万部もの『方法序説』が日本語で読まれてきたことになる。そのことを、岩波書店の社長がフランスの知識人たちに語ったところ、彼らも非常に驚いて、フランスでは、大学入学資格試験の受験生が、『方法序説』のさわりの部分を読んでおくといったことはあっても、一般の市民が読むということは考えられない、といたく感心していたというのである(『論座』2007 年 3 月号)。

日本では、古今東西の古典から最新の研究書にいたるまで、膨大な数の翻訳がなされ、

それが日本の知的な文化に大きく貢献していることは多くの人が認めるところだろう。こうした蓄積の厚みも、いま改めて評価する必要があると思う。

また、市民講座やカルチャーセンターなどにおいても、人文学の存在感はいまなお大きい。人文学も、まだまだ捨てたものではないと言えよう。

最後に、人文学が冷たい視線にさらされている状況から脱け出す活路はあるのかという点について。先にもふれたように、これまで人文系の研究者たちは、一種の誇りもこめて、虚学と称して居直ってきた面もあったが、今はそれだけではすまされなくなっているように思われる。いま一度人文学というものを見直し、学生や社会人、とりわけ読書人と言われる人たちに、人文学の意味をアピールしてゆく、換言すれば私たちの仲間やサポーターをふやすという努力が求められているのではないだろうか。そのためには、人文学の研究そのものも、変わってゆく必要がある。

人文学もますます専門分化の度を深めているが、それには功と罪の両面がある。後者について言えば、あまりにも専門分化してくると、専門外の人々に語るということが、じつにむつかしくなってくる、そういう意味で、専門知と全体を見る見識とのバランスを取ることが、ますます必要になっている。また人文学には旧来のさまざまな学問領域があるが、それらの領域を組み替える、あるいは新しい研究領域を創出するという試みも大いに必要だろう。

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科も、外から見れば、いかにも静かにまどろんでいるかに見えるかもしれない。しかし、実は新しい試みも活発に行われている。ここ数年の間に、人間誰しもが経験する生と死をめぐる諸問題について考究する COE の「死生学」が、学外からも大きな関心を集め、高く評価される実績をあげる一方、新たな研究領域を開発する次世代人文学開発センターという機構も誕生した。また、これまでの一国一言語式の文学研究を超えて、現代文学の潮流や現象をトータルに捉えようとする現代文芸論という新しい学科も生まれた。このような面についても、イエール大学ではどのような取り組みがなされているのか、うかがうことができれば幸いである。

## イエール大学における人文学の伝統とリベラル・アーツ

George Joseph

私は、ほかの3人とは異なり、日本に関連する分野の専門家ではない。19世紀後半のアメリカ史で Ph. D を取得し、現在はアドミニストレーターとして、とくにイエール大学の東アジアにおける国際交流を担当している者である。そういう私の立場から見たお話させていただこうと考えて、このセミナーに参加したしだいである。

さて、いまうかがったような人文学の危機は、日本のコンテクストのなかでのもので、イエール大学にはあてはまらないと言ってよろしいかと思う。そこで私は、イエール大学ではなぜそのような人文学の危機はないのかということについて、まずお話してみたい。

イエール大学で学ぶ学生の大半は、二つの school に属している。一つは Yale College で、undergraduate の課程、いま一つは graduate school of arts and science で、Ph. D やマスターをめざして学ぶ課程である。では、学生たちはどういった分野を学んでいるのかと言えば、大半の学生は結局、実のところ、人文学を学んでいるとってよいのである。学士号 Bachelor 取得をめざす undergraduate の課程で最も人気のある専攻科目 major は、歴史、英語、政治学、経済学等で、政治学や経済学はきわめて学際的な分野である(したがって人文学にも関連してくる)。それに対して、自然科学を専攻する学生は、イエールではあまり多くない。またイエール大学の社会的評価も、この数十年にわたって、人文学および社会科学系の強い大学という名声を勝ち得てきた。また、人文学を学んでいる学生が多だけでなく、文学科、歴史学科、経済学科、政治学科といった学科 department が、イエールのなかで最大の教授陣を擁し、graduate school の Ph. D コースに進学する学生の数も最多であり、資金 resources も豊富である。

このようにイエール大学における人文学の様相は、東京大学のばあいと、かなり異なっているが、しかしながらこのような違いがどうして生じているのかということを考えてときに、より根本的な問題として、アメリカの college(学部)教育においては liberal arts というものが大きな位置を占めているということに注目しなければならないと思う。

Yale University(の前身)は、1701年に創設されたが、それは自然科学や職業教育のために設立されたのではなかった。Yale University、いな、Yale College は、主として聖職者を養成する機関として設立されたのであり、18世紀のカリキュラムは、神学のほかに文学・哲学・古典・ギリシャ語・ラテン語・ヘブライ語等から成っていた。これらのコア・カリキュラムは、まさにこんにち私たちが人文学とみなしているものにほかならない。そして、Yale が University として発展した19世紀の末になって、ようやく、自然科学系諸学を大学のカリキュラムのなかにもどう位置づけるかということが問題となってきたのである。

ちょうどその頃、東京大学も創設されたわけであるが、東京大学が設立された事情は、当時イエール大学が直面していた状況とは大きく異なっていた。日本の大学は、ドイツの大学と Wissenschaft を範として創設され、そこでは物理・化学・数学といった自然科学の研

究が大いに重視された割には、人文学・社会科学はさほど重視されなかった。東京大学もイエール大学も、ともにこんにち研究大学 *research university* として高く評価される大学でありながら、人文学に求めるところがどうしてこれほど異なるのかということの一つの理由として、私は、この二つの大学が直面してきた課題がきわめて対照的であったということを目指したい。すなわち、イエール大学のばあいは、すでに 180 年にわたって人文学の基礎が固められてきており、19 世紀の末にイエールが直面していた課題は、いかにして自然科学をそのシステムのなかに統合してゆくかということであった。それに対してみなさんは逆に、自然科学や技術を重視してきたシステムのなかに、いかにして人文学をより深く統合してゆくかということに、苦心しておられるのだと思う。

さて、視点を現代に戻して、*liberal arts*こそが *Yale College* の根幹なのだということをお話したい。*Yale College* に入学した学生はすべて、人文・社会科学系の授業および母語以外の語学を履修することが求められるのであるが、最初の 2 年間は、いかなる *specialization* も *professionalization* も要求されない。日本の制度では、大学に入学を志願する際に、はじめから専攻する分野を決めていなければならないと聞いているが、*Yale College* に入学する者には、専攻 *major* を何にするかということは、まったく問われないのである。入学して 2 年を経たのちに、専攻を決めるのであるが、学生たちはこの最初の 2 年間の間に幅広い知識を修得するだけでなく、この *liberal arts curriculum* の自由さのゆえに、学生たちは 4 年間の勉学を通して取得される学士号 *Bachelor degree* も、将来のキャリアに直結するものとは考えていない。将来のキャリアのためには、それがビジネスであれ、工学であれ、医学であれ、法学であれ、*graduate school* に進んでさらなる訓練を受けるのが当然であると考えている。学士号といったものは、キャリアのための最終学歴とは考えられていないのである。一部の学生にとってはそうであっても、大半の学生はさらに上級の *degree* を取得することになる。

次に言及しておきたいのは、*liberal arts* と大学の機構との関連である。それが、大学全体における人文学の位置づけにも、決定的に影響してくると思われるからである。東京大学は多くの学部に分かれているが、イエール大学には、*Faculty of Arts and Sciences* という一つの学部しかなく、そのなかに、Hill 先生や Gerow 先生もいらっしゃれば、物理学や化学や生化学の先生もいるわけである。学部が分かれていると、その枠を越えての協力ということを阻害する面があるのではないだろうか。もちろん、ひじょうに専門分化が進んだ現代においては、化学者と哲学者がお互いの専門分野についてすんなりと分かりあえるはずはないにしても、しかしすべての教員が同じ *faculty* に属していれば、そこにはおのずから相互作用が進行するのである。

さて、先ほどの小松教授の報告のなかで、人文学の正当化 *justification* の必要性ということが言われていた。また、研究の経済性、生産性や成果物による *justification* という考え方があることにも言及され、イエール大学のばあいはどうなのかということが問われていた。それにお答えしたいのであるが、私は、大学にはたんに学生を教えるということだけでなく、人類の知識を保存し、永続化し、またそれを拡充深化して次の世代に伝えてゆくとい

う義務があると思う。たとえそれが、古代中近東のもはや使われていない文字であろうと、あるいは14世紀以後の科学史であろうと、大学にはそれらの知識を保存し、将来に伝えてゆく義務がある。また、古代中近東の文字にしても、たんにそれが解読できるというだけでなく、その文字が私たちに物語っているその時代の社会や文化をも解明してゆくというように、知識を拡充深化させて、次の世代に伝えてゆくのである。イエール大学にも、ずいぶん特殊な研究をしている先生がおられるが、そのような研究が、実用性によって評価されるというようなことは、イエールにはない、と申し上げたい。

また、もとより人文学教育も、イエール大学では、ひじょうに重視されている。それは、人文学教育は、若い人たちに **critical thinking** の力を培うことができるからである。この **critical thinking** の力というものは、理工系の職業につく人にも不可欠なものであり、したがってそういう人たちも人文学を学ばなければならないということが、当然のこととされているのである。

最後に、国際化と人文学ということについても、ぜひ一言申し上げておきたい。いったい自然科学の研究は、その本来的な性格からして、協働的であるが、人文学はそうではなく、その研究は個々の研究者のいわば孤独な営為としてなされている。しかしながら、国際的な交流が活発になっているこんにち、人文学の分野でも、国際的な交流が進むことが有益であることは言うまでもないことであろう。いま、東京大学とイエール大学との間で進められている UT・イエール・イニシアティブの計画は、ひじょうに有意義なものであると思う。この計画によれば、毎年数名の日本関係の研究者が東京大学からイエール大学に派遣され、授業や共同研究に携わるのであるが、これによってイエール大学の日本研究が大きな恩恵をこうむるであろうことは申すまでもないけれども、イエールに来られる研究者の方にとっても、きっとよい面があるのではないかと私は思うのである。東京大学の先生がたに、今日私がお話したようなイエール大学における人文学のあり方を、ぜひ実際に経験していただきたいと私は願っている。

## イエール大学における人文学教育と日本文学教育

Christopher Hill

私は、イエール大学で学生たちがどのように日本文学を学んでいるのか、そしてそこにはどのような課題があるのかということについて、お話してみたい。それを通して、イエール大学の人文学のなかで日本文学がどのような位置をしめているのかということをご理解いただけるかと思うからである。

イエール大学において、日本語・中国語・韓国語などを学ぶ学生は近年ますます増大してきている。また日本に関するコースを履修する学生数も多い。しかしそのなかで、日本あるいは東アジアに関するトピックを専攻している学生となると、必ずしもそれほど多くないのである。

日本に関する専攻には二つのものがある。一つは、東アジア専攻で、これは東アジア研究所で行われている。いま一つは日本語・日本文学専攻で、これは私の所属する *East Asian languages and Literatures* という department で教えられている。

日本語・日本文学専攻では、日本語修得にひじょうな努力が要求される。senior、つまり4年次の学生は、現代日本語の新聞やエッセーや劇の脚本や小説も読めなければならないし、また文語もマスターしていなければならない。さらに、日本映画や日本文化に関する授業も取らなければならない。ということで、日本語・日本文学を専攻して卒業する学生は、毎年1～2名である。ちなみに、中国語・中国文学を専攻して卒業する学生は、毎年5名程度いる。

日本に関するテーマを専攻するためのもう一つの道は東アジア専攻で、こちらのほうがアメリカでは通常のコースである。このコースでは、日本や中国に関して、人文学と社会科学とに相渉る総合的なカリキュラムを履修しなければならないが、文語を学ぶことなどは要求されない。日本に関しては、現代の日本語、日本文学、日本史、美術史、そして政治学などを広く取り混ぜて学ぶことになる。このコースで、日本もしくは東アジアに関する研究を専攻して卒業する学生は、毎年5名程度である。

このほかにも、たとえば歴史を専攻して、そのなかで日本史にフォーカスを当てる学生もいるが、それはまれなケースと行ってよい。

以上のような学部レベルでの日本文学の教育には、大学院レベルと比べて大きな違いがある。たとえば学部では、英訳を用いて教えることが多い。というのは、多くの学生が、一篇の小説を一週間で読み終わられるような日本語能力を持たないからである。一冊の小説を原文で読むとしたら、一学期全部かかってしまう、その程度の日本語能力しかないわけである。

しかも、学部レベルでは、広い領域にわたる実にさまざまな専攻の学生がいて、そのなかで日本あるいは東アジアのことを専攻している学生はごく一部にすぎない。多くの学生

が文学に興味をもっているが、しかし彼らのバックグラウンドはアメリカ文学、イギリス文学であり、またフランス文学等である。のみならず、まったくかけ離れた領域、たとえば生化学や心理学を専攻している学生もおり、それら多くの学生にとっては、日本文学を履修するのはまったく初めてなのである。こうした学生に対しては、たとえば近代文学の授業であれば、言文一致とか私小説とか、そういった基礎知識から教えてゆかねばならないので、どのようなテーマを取り上げるかという点でも、また議論を深化させてゆくという面でも、ひじょうに大きな制約を課せられることになる。ましてや近代以前の日本文学を教えることは至難のわざである。たとえば日本の和歌というものについてまったく予備知識をもたない学生にとって、平安時代の和歌を理解することは不可能であろう。また、源氏物語やあるいは軍記物語などをまったく読んだことのない学生が、近世の戯作を読んで理解することもきわめて困難である。

多くの学生たちは、80年代、90年代あるいは今世紀の現代文学に強い関心をもっており、また映画やアニメに興味をもっている。村上春樹を取り上げれば、必ず人気のある授業となる。しかし彼らは、夏目漱石も紫式部も知らないのである。読めば必ず好きになるのであるが、食わず嫌いで、なかなか読もうとしない。

先にのべたように、実にさまざまな専攻の学生がいるので、文学について議論するにしても、そのレベルもまたさまざまである。私の授業を受けに来る学生のなかには、日本語や日本史などを学んだのちに来ている学生もいれば、ただ文学に興味があるというだけで、日本文学については何も知らない学生もいる。この、ただ文学に興味があるというだけで来ている学生というのは、多くは英米文学、フランス文学、ドイツ文学、ロシア文学、あるいは比較文学を専攻している学生たちで、彼らは、語り、比喩、イメージといったことについて巧みに議論することができ、純粋な解釈 *pure analysis* ということにかけてはしばしばきわめて優秀であるが、日本に関する知識はというと、ばかげたステレオタイプのものしか持ち合わせていない。一方、日本語や東アジア研究をバックグラウンドとして私のクラスに来る学生たちは、そうした背景的な基礎知識はもっていても、文学について語ることは不得手であることが多い。

このようにイェールの学部教育は、さまざまな分野を専攻する学生がいりまじっているので、もちろんそこにはよい面もあるが、しかし、日本文学に関する授業をたった一つしか取らないような学生たちがほとんどであるようななかでは、演習にも高度な内容を盛り込むことは困難である。

それに対して大学院では、日本語の原文をテキストとして、ずっと高度な内容の演習を行うことができる。参加している学生の多くは、日本文学を専攻する博士課程の学生であり、そのほかに東アジア研究を専攻する修士課程の学生や、あるいは人類学専攻で日本のことをやっている学生などが若干いるという程度である。ただ学生たちの日本語能力はまだまだ向上の余地を残しており、長い小説は短く分割して、時間をかけて読んでゆかなければならない。また彼らは学部時代に、鷗外・漱石や永井荷風といった代表的な *canonical* 作家たちについてはある程度学んでいるが、その知識はまだまだ不十分である。

そして私たちは彼らに、日本文学研究にはさまざまなアプローチがあることを教えなければならぬ。たとえば英語圏の日本文学研究と日本におけるそれとは異なる面がある。さらにほかの領域、たとえばフランス文学やドイツ文学における文学評論や批評理論のさまざまなトレンドについても教えなければならぬ。が、それらの領域にはそれぞれの課題に応じた方法論があるので、学生たちはそれらを日本文学研究に応用してゆくさいには、各自のなかで、一種の翻訳作業を行ってゆかなければならぬのである。

以上、イエール大学で日本文学の教育を行ってゆくことにともなうさまざまな困難についてお話してきたが、最後に、私が最も重要な課題と考えることについてのべさせていだきたい。それは、グローバリゼーションの時代のなかで日本文学研究が、あるいは人文学が直面している課題である。イエール大学のさまざまな学問領域のなかで、日本文学研究も、小さくはあるが、安定した地歩をしめている。しかし私たちはそこに安住してはならないであろう。私たちは、日本文学を、いままでとは違ったかたちで世界に提示してゆかなければならぬのではないだろうか。私が大学院で学んでいたころは、日本文学は東洋文学の一つとみなされる傾向があった。しかし、いまの若い人たちはそのような観方はしていないのである。そしてそこから、イエール大学における人文学の一つの課題が引き出されてくると思う。イエール大学は、たしかに人文学に強い大学であるが、しかしそこではやはりヨーロッパが中心になっている。けれども、そうしたヨーロッパ中心主義に対して、イエールの学生も教授陣も疑念を抱くようになってきている。私たちは人文学というものを、これまでとは違ったかたちで捉えなおしてゆく必要があるが、そのさいに、日本文学やまた日本の人文学に学ぶことが大きな意義を有してくるであろうと思うのである。

## 映画学、人文学と「コンテンツ」

Aaron Gerow

私の専門とする映画学という学問は、日本ではまだあまり学問として認められていないと思う。東大には、総合文化研究科の表象論に、蓮実重彦先生のような高名な方がおられたが、それは例外的と言ってよいであろう。

しかしアメリカでも、今でこそ学問分野として確立し、多くの大学に映画学の専攻が置かれているが、以前はそうではなかった。またアメリカでは、すでに戦前から映画学はあったが、しかしそれは主として社会学であって、人文学ではなかった。映画は産業の産物とみなされ、またマスコミュニケーションやマス・カルチャーの一部とみなされていたからである。1960年代頃から、映画もまた作家の作品として作家論的な研究の対象となり、さらにフランスの記号論的研究もはいつてきて、人文学の学問として認知されるようになったのである。

それでも、アメリカの東海岸の大学と中西部の大学とでは差があり、伝統的な東海岸の大学に対して進取的な中西部の大学のほうが、映画学の導入も早かったのであるが、そうしたなかで、東海岸のイエールでは比較的早く、1966年から映画学の授業が行われている。とはいえ、当初は美術史学科のなかに置かれ、学生が映画学を専攻することはできなかった。ようやく1985年になって正式に映画学の専攻 major が新設されたが、department ではなく program としてであって、さまざまな department からの教員が集まって担当する専攻であった。その時に、映画学のすぐれた専門家たちも雇用されたのであるが、長く助教授のまま tenure が与えられなかったので、みなほかの大学に転出してしまった。tenure のある教授2名が置かれたのはつい最近、2000年のことである。

が、それはさておき、イエールの映画学は、当初から学際的な人文学であった。つまり、実際に映画を作ることよりも、映画の歴史や理論や文学史等を重視しているということである。また、2003年から映画学の博士課程もできたが、この博士課程では映画学だけを専攻することは認められず、アメリカン・スタディーズのようなエリア・スタディーズや比較文学、美術史等の学科に籍を置かなければならないのである。

映画学が学問として大学のなかに確固たる地歩を築くことができたことについては、二つの大きな理由が考えられる。一つは、映画学は新しい学問の象徴的な存在だったということである。映画学は学際的な学問で、人文学のなかのいくつかのディスプリンの橋渡しができるだけでなく、人文学と社会学との橋渡しもできる。またイエールでは、アメリカ映画を専門にしたくても、必ずヨーロッパやアジアの映画も研究しなければならないとされているように、学問の国際化に貢献できる分野としても認められているわけである。

いま一つの大きな理由は、社会の変化である。メディア社会、映像社会などといわれるような世の中になり、映画学への社会からの要請が高まった。イエールの映画学プログラ

ムは、映画産業からの多大な支援を受けている。たとえば、私たちはDVDは使わず、35mmフィルムを用いて授業を行っているが、いくつかの映画会社が35mmフィルムを無償で貸与してくれている。我々の学生をインターンシップとして研修させてくれてもいる。イェールに限らず、アメリカの多くの大学で、映画学は映画産業から多大な寄付を受けている。その点で、アメリカの映画産業は日本のそれとは大きく異なっている。一つには、言うまでもなくそれが税金対策にもなるからであるが、それだけではない。アメリカの映画産業は、大学の映画学に二つの育成機能を見出しているのである。一つは、すぐれた映画のクリエイターを育成する機能であるが、いま一つは、映画の良質な消費者を生み出す機能である。アメリカの多くの大学に映画学の授業があるので、毎年何十万という学生が、大学で映画を観ていることになる。彼らは新しい映画だけでなく、古い映画もたくさん観ている。当然彼らは、映画館に行って新しい映画を観続けるであろうし、古い映画のDVDも買うであろう。アメリカでは古い映画のDVDもたくさん出ているが、大学の映画学がそうした消費者を育成したとも言えるわけである。

2年前、New York Timesに「映画学は次の経営学修士(MBA)か？」というタイトルの記事が出たことがある。今後、インターネットやDVD、アニメ、ゲーム・ソフトといった、いわゆるコンテンツ産業がいよいよ栄えるであろう。これからのビジネスマンは、そうしたメディアを知らなければ、よい経営者にはなれないという趣旨の記事であった。この是非はともかくとして、こんにちそのような観方が支配的なのはたしかであり、学生たちの間でも優勢である。イェールで映画学を学ぶ学生のなかには、もちろん実際に映画を作りたいと思っている者もいるが、ビジネスマンや弁護士志望で、このNew York Timesの記事にみられるような考えから、映画学を専攻している学生も多い。そういった点で彼らは賢い、恐ろしいほど賢いところがある。

このように、映画学という学問領域には、ほかの領域と違って、経済の論理が強く侵入してくるところがあり、私自身、それに困惑させられることも少なくないのであるが、ただ、アメリカのコンテンツ産業は、映画学だけでなく、人文学そのものを重視する姿勢を有しているといつてよいように思われる。それは、彼らもまた、水準の高い、良質な消費者を育てたいと思っているからである。私も、映画学を通して、批評力のある良質な消費者を育てたいと思っている。

数週間前の「あるある大辞典」というテレビ番組の事件に端的に現れたように、一般的に言って、日本人はメディア・リテラシーということに無自覚なのではないだろうか。人文学教育には、若い人たちのメディアを読む力、ことばを読む力を培ってゆくという重要な役割があると思う。また、映画学は以前は存立のあやうい学問であったが、私たちは生き残りのために、産業界からの支援なども戦略的に利用してきた。これからは、人文学全体に、そのような戦略的思考が要請されてくるのではないだろうか。

## 電子化時代の人文学教育における図書館の役割

### “A Manifesto for the Humanities in a Technological Age”

#### — A Library Curator's Response

Ellen Hammond

このセミナーで、ライブラリアンとしての立場から人文学について何か語るようにという依頼を受けたとき、すぐに私の頭に浮かんだ一つの論文がある。*The Chronicle of Higher Education* という、アメリカおよび世界のアカデミック・トレンドを詳しく紹介していて、アメリカの大学関係者の間ではよく読まれているジャーナルの、2004年2月13日号に掲載されていたものである。それは、二人の高名な人文学者、デューク大学の Cathy N. Davidson 教授とカリフォルニア・アルヴァイン大学の David Theo Goldberg 教授による共同執筆で、タイトルは、“A Manifesto for the Humanities in a Technological Age” というものであった。

この論文の前半で、彼らは人文学を擁護する雄弁な議論を展開し、歴史的コンテクストを理解することや、異なる文化、言語、宗教等を理解することの重要性に対する確信を表明し、人文学者たちが学際的な研究や協同的な研究を推し進めていることを称賛している。そして、人文学教育の目標は、先ほどジョゼフ氏も言われていたように、若い人たちの *critical thinking* の能力を高めることにあり、この競争的なグローバル経済の世界に生きる学生たちにとって、*critical thinking* の能力の重要性が、かつてないほど高まっていると論じている。この前半部分の論調は、ひじょうに確信に満ち、説得力に富んだものであった。

ところが論述が、タイトルにもあるように、人文学からテクノロジーへと移ったとたん、論調は一変して歯切れが悪くなり、著者たちの主張は曖昧なものとなっている。しかしながら、かえってそこから、テクノロジーの時代に直面した人文学者の緊張感といったものが、まざまざと伝わってくるのである。

テクノロジーに対する著者たちの困惑感、私たちライブラリアンにとっても、大いに共感されるものである。というのも、私たちのなかにも、人文学の領域で M. A. や Ph. D を取得しながら、教壇に立つのではなく、図書館ではたらくことを選択したという者が多いからである。そして私たちのほうが、職業柄、彼らよりもずっと早くからテクノロジーによる環境の変化に直面していた。彼らもまた、このデジタル化の時代における情報交流の質的变化、また研究や教育の方法そのものの変化といった状況に対応した、新しい研究・教育環境を創出してゆかなければならないとのべているが、私たちライブラリアンもまさにそのような課題に直面しているのであって、この論文のなかで著者たちが、一度も図書館もしくはライブラリアンに言及することがなかったことに、不満をなしとしないのである。

今日、私はみなさんに、現在イェールで行われている、人文学者たちとライブラリアンたちとのコラボレーションの試みを幾つかご紹介してみたい。ただしそれらは、まだ始ま

ったばかりのものであり、その成果がじゅうぶんに立証された成功例としてお話するのではない。この電子化の環境のなかで、人文学者とライブラリアンが共同して取り組んでいる新しい試みとして聞いていただきたい。

最初にご紹介したいのは、Electronic Library Initiative の頭文字を取って E. L. I. (エライ) と略称されているプロジェクトで、Teaching and Learning Collaborative Project としても知られている。これは、目下図書館が大きな助成金を得て進めているプロジェクトで、教員が、librarian や archivist、curator の協力のもと、さまざまなテキストや画像等を授業に活用できるようにする試みである。また情報技術の専門家の指導も組み入れて、教室でさまざまなソフト・ウェア、ハード・ウェア、ウェブ・サイトなども利用しながら授業を展開できるようにしている。学生たちが、コラボレーションを通して、コンピュータによる情報処理能力を高めつつ、同時に critical thinking の能力をも培ってゆくことができるように、イエールのさまざまな専門家が共同して支援体制を組んでいるわけである。

ヒル先生もこのプロジェクトの一環として、デジタル化されたテキストや画像を用いて江戸時代の文学作品を翻訳するという授業を行っておられる。イエールのアート・ギャラリー・コレクションのなかには、源氏物語や平家物語を描いた徳川時代の屏風があるし、Beinecke Rare Book and Manuscript Library には、奈良絵本の複製もある。また Sterling Memorial Library には、江戸時代の大衆的な読み物の版本や、都市の古地図、庭園図、建物図等々もある。これはまだ計画段階であるが、ヒル先生は、そうしたイエールが所蔵するあらゆる資料を生かして、学生たちが、たんに作品の内容やテキストの解釈だけでなく、それを生み出した環境をも理解することができるようにしたいと考えておられるのである。

もう一つ、これはまだごく最近始まったばかりのプロジェクトであるが、イエールの所蔵する江戸時代の古地図を、日本語と英語の地名辞典とリンクさせてデジタル化するプロジェクトもあり、これにはライブラリアンと日本文学を専攻する大学院生たちが共同している。そのなかには、「名所図会」で論文を書こうとしている大学院生もいる。将来は、日本史や日本文学の授業にも、このデジタル化された資料が活用されるようにしたいと私たちは考えている。

まだまだ紹介したいプロジェクトがあるのだが、時間がないので割愛する。最後に言っておきたいことは、こうしたプロジェクトに参加している教員たちが共通して、近代の活字化されたテキストだけでなく、そのテキストの本来のかたち、プライマリ・リソースにも関心を向けるようになり、学生たちにも、そうしたプライマリ・リソースにじかにふれさせたいと願うようになったということである。また、日本文学のばあいとはくに絵とともに享受されることが多かったわけで、画像資料を取り入れることは、テキストじたいをも新しい視角から捉えなおすことに役立つであろう。しかしながら、そうしたプライマリ・リソースは、デジタル化されたものを通してしか接し得ないものが多い。その意味で、デジタル化された資料というものは、今後人文学の研究と教育に大きく貢献することが期待されると言ってもよいのではないだろうか。

## コ メ ン ト

高山 博

私の専門はヨーロッパ中世史で、1990年にイェール大学で Ph. D を取得した。それでコメンテーターを仰せつかったわけであるが、実は私はこの数年間、日本の人文学を大学の外から見るといふ立場にもあった。21世紀 COE プログラムの分野別専門委員として、人文科学分野のプロジェクトの選考と中間評価を行い、また日本学術振興会に新設された人文学プログラム・オフィサーとして、人文学分野の科学研究費補助金・特別研究員・国際交流事業の審査員候補者の選考およびその審査の検証、日本学術振興会賞候補者の予備審査、日本学術振興会の事業に対する提案・助言といった仕事にも携わってきた。今年の一、二月、人文学の研究動向に関する調査報告を文部科学省に提出したところなのであるが、今日は、そうした仕事に携わりながら、この数年、日本の人文学について考えてきたこと、考えさせられたこととも絡めてコメントさせていただきたいと思う。

私もまた、最初の小松氏の報告のように、日本の人文学の現状と課題について、三つのレベルに分けてのべてみたい。人文学と一般社会との関係、人文学と国との関係、そして人文学と大学との関係あるいは大学のなかにおける人文学の位置づけ、というこの三つのレベルである。

まず人文学と一般社会との関係であるが、学生の間にも実利志向が強まっていて、ビジネス・スクールや法学部等に学生の人気シフトしているといった傾向は、アメリカでもヨーロッパでもある程度同じような状況はあるように思われる。ただ日本のばあい気になるのは、人文学は役に立たないというような認識が、巷間に流布しているように見受けられることである。人文学は、人間と社会を研究対象とする学問であり、それは私たちが生きてゆくうえで有用な——あえて「役に立つ」と言いたいのだが——知や洞察力を与えてくれる。それは、短期間で改良されてゆく技術や、すぐに古びてしまう知識や情報などとは違って、長期にわたって有効性の持続するものである。人文学は虚学であるというような認識はまったく誤りである。だが、小松教授も言われたように、私たちは、人文学の有用性を、これからは社会に対して積極的に発信していかなければならないのだと思う。そこでイェール大学の方たちにお聞きしたいのであるが、社会に対して人文学の有用性を訴えてゆくにはどうしたらよいのか、もし何か参考になるようなことがあれば、お教えいただきたい。

第二の国との関係であるが、国が何を重要と考えているかによって、予算配分も変わってくるわけであるけれども、日本のばあいは自然科学の発言力・存在感がひじょうに大きい。予算配分の基準も研究の評価も、そのかなりの部分が理系のやり方でなされている。学術振興会でも 21 世紀 COE でも、ルールは一つしかない。多数決である。人文学の側で、いくらこれはおかしいのではないかと言っても通用しないという現実がある。ともかく日

本では、人文学への予算配分が少ない。ちなみにドイツでは文部大臣が、今年は「人文学の年」として人文学振興ために大幅な予算措置を取ると宣言した。また EU でも、約 50 ビリオン・ユーロを基礎学術のために充てるという予算が決定している。

第三の人文学と大学との関係、あるいは大学のなかにおける人文学の位置づけ、という点に関してであるが、イエールやハーバードやプリンストンのようなアメリカの名門大学は、もともと人文学を核にして発展してきた大学なので、ひじょうに人文学の伝統が強い。そのことは先ほどのジョゼフさんのお話からも、改めて強く印象づけられたところである。しかしながらその一方で、アメリカの大学では、一般的にいて、医学部、理学部、法学部、ビジネス・スクール等の教員の給料が高く、また寄付金も多い。そこで質問させていただきたいのであるが、イエールでは、人文学重視の伝統をこれからも堅持してゆけるとお考えであろうか。またイエール大学のなかでの人文学に対する予算配分はどうなっているのか。また、これはまさにいま我々が直面している問題なのであるが、日本では、国からの恒常的な経費の支給を減らして、そのかわりに競争的外部資金を獲得させるという方針が打ち出されている。そもそもアメリカの大学においては、研究資金はどのようになっているのであろうか。

最後にもう一つ伺わせていただきたいのは、Ph. D の学生に対する奨学金についてである。最初はスタンフォード大学であったと記憶するが、その後はイエールでもハーバードでもプリンストンでも、博士課程の学生全員に奨学金が支給されるようになったと聞いている。いったいそのような奨学金の資金はどのようにして確保されているのであろうか。

## セミナーの議論を振り返って

藤原 克己

### 1. バックグラウンドの違い

最初の小松教授の報告のなかで、「(人文学に寄せられる多くの批判の) 前提にあるのは、おそらくアメリカン・スタンダードなるものだろう。そこで一つ指摘しておきたいのは、イエール大学をはじめとして、アメリカの伝統ある大学では、人文学の伝統がきわめて健全なかたちで存在しているということである。こうした点を、私たちはもっと見直してみる必要があるのではないだろうか」という提言がなされていたが、それに続く Joseph 氏の報告は、期せずして、この小松氏の言葉を具体的に裏書するようなものであった。フロアから回収された質問用紙や意見・感想のアンケート用紙をみても、多くの参加者が、そのような意味で Joseph 氏の報告から強い感銘を受けていたことがうかがわれるのである。

日本とアメリカの大学のバックグラウンドの違いが、鮮明に浮かび上がってきたこと。まずその点で、このセミナーはひじょうに有意義なものであったということができよう。第二セッションにおける質疑応答のなかで、イエール大学では奨学金や研究資金はどのようになっているのかという高山教授の質問に対する Joseph 氏の答えは以下のようなものであった。

イエールでは、大学院に入学したすべての学生に対して、勉学に必要な経費が全額支給される。大体、授業料として年間 40,000 ドル(20,000 ドルの誤りか、藤原注)、それに生活費として 22,000~27,000 ドル、仮に Ph. D コースに 6 年間在籍していたとすれば、イエールはその学生に 275,000 ドル支払うことになる。イエール大学の大学院には毎年 600 人程度の学生がいるので、総額はかなりの額になる。またイエール・コレッジ(学部)でも同様である。イエールは、アメリカのトップ三大学の一つとして、授業料を払える学生を入学させるのではなく、世界中の最も優秀な学生を入学させるのである。入学を許可した学生には、学資援助の必要があるかをたずねる。すべての学部学生のニーズに応えるために、イエールでは年間 450,000,000 ドルの基金を用意している。たとえば学生の家庭の年収が 45,000 ドル未満であれば、家族が授業料を負担することはまったく要求されない。大学が入学を許可した限り、大学がその学生の面倒をすべてみるのである。

なぜイエールが、大学院や学部の学生にこれほど寛大に、惜しみなく援助ができるのかといえば、イエールには、寄付金の積み立てと投資収益からなる約 200 億ドル(\$20 billion)の潤沢な基金 endowment があるからである。基金の運用には、投資によって得られた利益の一部のみを充てており、長年にわたって、元本は損失なく増え続けている。もちろん株価の変動があるので、ほんとうに 200 億ドルあるかどうかは私には分からないが、いずれにしてもかなりの額であることにはかわりはない。この潤沢な基金によって、

大学を運営してゆく経費の約 40%をまかなっている。残りは、授業料を払える学生からの授業料収入や、学外の助成金、あるいは特定の研究に対する政府からの補助金などでまかなっている。

寄付金のなかには、使途が特定されているものがある。たとえば、70 年代の初めに住友銀行が、それほど巨額ではなかったが、日本学の講座を開設するための基金を寄付してくれた。これがその後の 35 年間で増え続けて、教授 3 人・助教授 2 人の講座と、図書館の経費をまかなえるまでになっている。

ちなみに、Joseph 氏があげている \$20 billion というイエール大学の基金については、たまたま今年の 2 月 18 日付 *New York Times* 誌に、'For Yale's Money Man, a Higher Calling' という見出しで、興味深い記事が掲載されていた。それは、イエール大学の investment office で活躍している David Swensen という投資家を紹介した記事で、一昨年、その勤続 20 年を祝うパーティが催されたが、この 20 年間で、イエールの基金は \$1.3 billion から \$14 billion に増え、祝賀会ではレヴィン学長も、イエール大学の財政に最も貢献した人物として、その功績を讃えたという。そしてさらに今年はそれが \$20 billion にまで達したというのである。Swensen 氏の手法は、従来の株式や社債等の手堅い投資から、ヘッジ・ファンドや石油・木材等の市場への投資などさまざまな手段を駆使するもので、近年では他大学でも氏のやり方に追随するようになってきているという。大学の財政基盤がこうした投資の上に築かれているということには、私たちはある種の違和感を禁じえないのであるが、いずれにしても日本の大学が一朝一夕に見習えることではないであろう。

ただ、Swensen 氏の手腕や \$20 billion という額の大きさは新聞種になるほどのものであるにしても、こうしたアメリカの(私立)大学における財政のあり方や奨学金の充実は、けっしてイエール大学だけのことでない。また、Joseph 氏がその報告「イエール大学における人文学の伝統とリベラル・アーツ」のなかでのべていたこと、すなわちイエール大学は Faculty of Arts and Sciences という単一学部のみからなる大学であり、そこでの undergraduate 教育はリベラル・アーツを根幹に据えてなされているということも、けっしてイエール大学だけのことではなく、むしろアメリカの大学のもっとも基本的なかたちであると言ってよい(谷聖美『アメリカの大学 ガヴァナンスから教育現場まで』ミネルヴァ書房、2006 年、第 2 章「大学の組織と財政」、第 4 章「学生選抜と財政支援」、第 5 章「学士教育」参照)。

Joseph 氏の話にもあるように、アメリカでは大学の財政基盤のかなりな部分を、企業等からの寄付金が占めているわけであるが、寄付をめぐる社会的環境もまた、アメリカと日本とは大きく異なっていよう。それはたんに減税措置といった税制面での違いなどにとどまるものではなく、ほとんど文化の違いといってもよいように思われる。そのことは、Gerow 氏の報告のなかの、「イエールに限らず、アメリカの多くの大学で、映画学は映画産業から多大な寄付を受けている。その点で、アメリカの映画産業は日本のそれとは大きく異なっている。一つには、言うまでもなくそれが税金対策にもなるからであるが、それだけではない。アメリカの映画産業は、大学の映画学に二つの育成機能を見出しているのである。

一つは、すぐれた映画のクリエイターを育成する機能であるが、いま一つは、映画の良質な消費者を生み出す機能である。(中略)アメリカのコンテンツ産業は、映画学だけでなく、人文学そのものを重視する姿勢を有しているといつてよいように思われる。それは、彼らもまた、水準の高い、良質な消費者を育てたいと思っているからである」という一節からもうかがわれよう。

競争原理、あるいはレッセフェールの市場主義がアメリカン・スタンダードだというような言説が、昨今の日本では横行しているきらいがあるけれども、アメリカで暮らした経験を有する多くの人々が、アメリカにはそれとはまた別の側面もあることを指摘している。なかでもよく聞かされるのが、日本では考えられないような奥の深い「寄付文化」とでもいうべきものの存在である。

アメリカの社会が有している一種の度量の広さ、あるいは奥行きの高さとでもいうべきものは、「イエール大学では、学部学生たちの専攻は、卒業後の職業と直結しているのかどうか」という質問に対する Gerow 氏の答えや Joseph 氏のコメントからもうかがわれたところであった。Gerow 氏の答えは以下のようなものであった。

私もヒルさんもそうだが、各学科には *director for undergraduate studies* という仕事を担当している教員がいる。これは、授業計画を立てたりすることのほかに、学生が2年次の後半になって専攻を決めるときの相談にのることも、大事な仕事となっている。私の担当する映画学の専攻でいえば、実は、映画産業で働きたいという学生は、それほど多くない。先ほどもお話したように、映画学を学ぶことは、ビジネスマンや弁護士になるにも有利な面があり、そうした就職のことを考えて専攻を決めている側面はたしかにある。

なお、これはとくにイエールの特徴かもしれないが、二重専攻 *double major* を取る学生がたいへん多い。そしてそのなかには、たとえば将来は医者になりたいのだが、大学で医学の勉強だけをしたのでは人生がつまらなくなるからということで、まったく異なる分野を二重専攻する者もいるけれども、そのいっぽうで、やはり就職に有利な条件を作るために二重専攻する学生もいるのである。というのも、アメリカでは、企業だけでなく、たとえばロー・スクールのような大学院でも、一つの分野だけを専攻した学生には魅力を感じていないということがある。とくにトップクラスのロー・スクールほどそういう傾向がある。そこで学生も、ロー・スクールにアプライするさいに、自分はこれほど幅広い分野に関心をもって勉強してきたということをアピールするために、いわば戦略的に、法学や政治学のような分野のほかに、それとはまったく異なる分野を二重専攻する、そういう学生も多いのである。

また Joseph 氏から、以下のようなコメントがなされた。

イエールの学生は、4年間の在学中、卒業後何をしたいという明確な目標をもっていない学生が多い。むしろ彼らは4年間を純粹に知的な探求の時代と捉えているのである。

たしかに、なかには医学部に行きたいとか工学の道に進みたいという明確な考えをもっていて、それに関連する自然科学系の授業を重点的に履修しようとする学生もいるが、各自の興味に応じて、自然科学の授業と人文学の授業とを組み合わせ履修している学生も多いのである。

実は、イエール大学の医学部に進学する学生は、自然科学専攻でない学生、人文学や社会学を専攻した学生が多いのである。イエールの大学院のなかで医学部は、異なる分野を専攻した学生、幅広い関心を追求した学生を最も多く受け入れている大学院である。

イエールの学位証明書には、特に一つの分野を専攻したということを明記していない。イエールでよく言われることなのであるが、イエール大学の卒業証書があるということは、ある特定のキャリアについての準備ができているということではなく、何に対しても準備ができおり、基礎的な学力と *critical thinking* の力を身につけており、どのようなキャリアについたとしても、きちんと自分の考えを主張することができるということなのである。

はじめにものべたように、このセミナーを通して、イエール大学における人文学の伝統の堅固さということもさることながら、アメリカの大学と日本の大学との間にある、社会的文化的な環境や歴史的コンテキストの違いが鮮明に浮かび上がってきた。そうした違いを無視して、いわゆるアメリカン・スタンダードを安易に押し当てたような改革が断行されるならば、日本の大学における人文学の研究教育は、息の根を止められてしまいかねないであろう。

## 2. 日本の人文学教育振興のために

Joseph 氏の「イエール大学における人文学の伝統とリベラル・アーツ」は、イエール大学の伝統と理念に立脚した、たいへん感銘深い報告であったけれども、続く Hill 氏の報告「イエール大学における人文学教育と日本文学教育」は、実際に学生を教えている教師が直面している、リベラル・アーツ教育の困難な側面を具体的に伝えてくれていて、考えさせられるものであった。すなわち、「学部レベルでは、広い領域にわたる実にさまざまな専攻の学生がいて、そのなかで日本あるいは東アジアのことを専攻している学生はごく一部にすぎない。多くの学生が文学に興味をもっているが、しかし彼らのバックグラウンドはアメリカ文学、イギリス文学であり、またフランス文学等である。のみならず、まったくかけ離れた領域、たとえば生化学や心理学を専攻している学生もおおり、それら多くの学生にとっては、日本文学を履修するのはまったく初めてなのである。こうした学生に対しては、たとえば近代文学の授業であれば、言文一致とか私小説とか、そういった基礎知識から教えてゆかねばならないので、どのようなテーマを取り上げるかという点でも、また議論を深化させてゆくという面でも、ひじょうに大きな制約を課せられることになる。ましてや近代以前の日本文学を教えることは至難のわざである」と。

してみれば、たとえば東京大学のように、駒場の教養課程と本郷の専門学部課程という二段階に分かれているあり方にも、見直すべきよい面があるのではないだろうか。

私たち文学部の教員は、文学部の学部学生に専門的な教育を行うかたわら、数年前から、「原典を読む」という講義を全学部向けに開講している。これは、哲学・歴史学・文学・社会学等の古典的な名著を、原文でじっくりと味読するという授業である。本郷に進学した学生は、それぞれの専門学部での履修に忙しく、とくに実験を行っている理系の学生には、なかなかこの授業を履修する余裕がないという実情のなかで、にもかかわらず毎年、少なからぬ他学部の学生が受講している。潜在的にはニーズの高い授業であるといえる。

社会生活や産業・技術に直結しているような諸学問分野とは異なり、人文学は、小松教授の報告や高山教授のコメントでも言われていたように、これからはその魅力と意義をアピールしてゆかなければならないのであろう。それは、日本の文化の向上のためにも必要なことであるにちがいない。

ただ、私たちがそのように努力しようと思っても、それを阻む状況がある。そのことは、ここで強く訴えておきたい。その状況とは、研究と教育以外の雑務に割かれる時間があまりにも多過ぎるということにほかならない。とくに人文学系の教員の多くは、入試の出題採点業務に多大な時間を奪われている。谷聖美氏の前掲『アメリカの大学』第4章「学生選抜と財政支援」には、アメリカの大学における学生選抜のシステムについても詳述されているが、アメリカには大学が個別に行う入試はなく、したがって教員が入試問題を作成したり採点したりするといったことはありえないのである。また同書・第3章「教員組織と人事システム、および教員の職務」によれば、アメリカの研究者には「校費」というものはないので、研究費は基本的に外部資金によって調達しなければならないが、外部資金の数が日本よりもずっと多し、総じてアメリカの大学は日本の大学よりも研究・教育に専念できる環境がはるかによく整備されているという。上記の「原典を読む」のほかに、駒場で、教養課程の学生向けに開講する授業をもっと増やしたいと思っている文学部の教員は多いのであるが、その時間的な余裕がないのである。

また小松教授は、「十数年前に東京大学をはじめ多くの大学で、大学院重点化ということが推進されたが、その後学部教育のほうがどうなっているのか、見直す必要もある」とのべていたが、これもひじょうに重要な提言であると言わなければならない。進学する学生数が減ったとはいっても、なお多くの大学院生を擁している研究室の教員には、大学院生の論文指導に時間を割かれて、学部学生の卒業論文にじゅうぶんな指導ができないというもどかしい思いを毎年のように抱きながら、卒業生を送り出しているという現状がある。

最後に、人文学の社会的貢献ということについてもものべておきたい。やはり小松教授の報告のなかでもふれられていたように、日本ほど、人文学の領域に関わる翻訳書・入門書や文庫・新書の充実している国はないといってよいのであるが、そうした翻訳書・入門書や文庫・新書の類も、それぞれの著者一人の力で成ったものではなく、多くの研究の蓄積の上に成り立っているのである。そうした人文学の社会的貢献が、総合的に評価されることがないのは、きわめて遺憾である。これも、近年の評価がすべて理系準拠であることに

由来する重大な欠陥であり、人文学の研究と教育に対する、理系準拠ではない、人文学独自の、その学の性格に見合った評価基準の樹立が切実に待たれるゆえんである。

## 海外諸大学の現況

以下に、海外諸大学の人文学関係の資料を掲載する。時間的制約とそれぞれの大学の情報公開の方針の違いにより、データの分類や情報量に差異が生じていることをあらかじめお断りする。また、すべての学問分野を網羅することは不可能であるため、日本の人文学教育において一般的であり、なおかつ、国や地域の特異性に比較的影響されにくいと思われる教育研究分野として、「美術史」「宗教学」「言語学」を中心に調査した。すでに述べたように、学部学科構成に大学の個性が反映するのは当然であって、カリキュラムにも大学の独自性が反映されているため、この3つのディシプリン選択はあくまで便宜的なものである。明確に対応するカリキュラムが見つからない場合は、適宜、隣接学科目を参照することとした。これもまた国や文化や大学の多様性を示すものであることは言うまでもない。

ソウル大学校、北京大学の人員構成を見て、日本の大学との大きな相違は、自国文化の典型的な表現の教育研究を担うと言っているいわゆる「国語国文学」の持つ比重の大きさである。「国民国家」「国民文化」概念の検証とは別に、この差異は意味深い。そうした韓国においてすら、「東洋の知的伝統では、思想家・歴史家・哲学者とはすなわち名文章家を意味した。高麗・朝鮮時代の性理学者や中国の唐宋八大家は当代最高の知識人であるとともに、自国の言葉の美しさと精巧さを一段階引き上げた文章家でもあった。多くの石やもみ殻が混ざったご飯を炊いて置きながら、体に良いから選り分けて食べろと言わんばかりの、不親切極まりない文章が横行している最近の状況とは大違いである。近年、思想と文章を調和させる東洋の知的伝統が急激に衰退したことと、人文学が直面している危機には密接な関連があるのである」という警告が発せられる（『朝鮮日報』2006年9月21日社説）状況にあるという事実を、「国語国文学」を見事に軽視しているわれわれとしてはより深刻に受け止めなくてはならないだろう。

英米の大学のカリキュラムを瞥見してすぐに気づかされるのは、いわゆる「世界的視野」への志向が強いということである。これはそれぞれのディシプリン形成がヨーロッパを中心になされたことと無縁ではなく、われわれもそうした学問を所与のものとして受入れ、教育研究を行ってきたという歴史がある以上、自国、自地域中心主義に陥らないよう、その「世界的視野」への志向性を守っていかなくてはならない。その点で、この英米のカリキュラムモデルは日本の今後の人文学の発展において参考にするべき点が多々ある。

問題はこの二つの視点をどのように共存させるかであろう。性急な結論を出す前に、高校までの教育体制、教養教育との関連、グローバル言語としての英語の位置づけなどについて、総合的な検討が必要になっている。

# ソウル大学

## 全体構成

韓国では総合大学を大学校、単科大学・学部を大学と称する

### 本校（冠岳キャンパス）

人文大学

社会科学大学（経済学、政治学、社会学、人類学、心理学、地理学）

法科大学

経営大学

工科大学

自然科学大学（理学）

管理大学

農業生命科学大学

獣医科大学

薬科大学

美術大学

音楽大学

師範大学（教育学、教員養成）

生活科学大学（家政学）

### 分校（蓮建キャンパス：旧京城帝国大学医学部）

医科大学

歯科大学

看護大学

### 独立大学院

保健大学院

行政大学院

環境大学院

国際大学院

## 人文学部概要

『人文大学案内』2006年版より編集

### (1) 学科構成と教員数

学 科	教員数 (女性)
1. 国語国文学科	25名 (3)
国語学	11
国文学	14
2. 中語中文学科	10名 (0)
中国語学	2
中国文学	8
3. 英語英文学科	27名 (9)
英語学	7
英文学	20
4. 仏語仏文学科	11名 (1)
仏語学	3
仏文学	8
5. 独語独文学科	12名 (3)
独語学	3
独文学	9
6. 露語露文学科	6名 (3)
7. 西語西文学科	5名 (1)
8. 言語学科	8名 (0)
9. 国史学科	11名 (1)
10. 東洋史学科	9名 (1)
11. 西洋史学科	7名 (2)
12. 考古美術学科	6名 (2)
13. 哲学科	17名 (1)
14. 宗教学科	6名 (0)
15. 美学科	6名 (6)
合計	166名 (33)

## (2) 学科授業科目

### 1. 国語国文学科 Dept. of Korean Language and Literature

専攻探索教科目	韓国語研究入門、韓国文学研究入門、韓国文学と韓国社会
学部専攻科目	韓国語音韻論、韓国古典詩歌講読、韓国現代戯曲論、韓国古典文学史、韓国現代文学史、韓国古典散文講読、韓国語の歴史、韓国語文法論、韓国古典小説論、現代韓国詩論、韓国現代詩人論、現代韓国小説論、韓国現代作家論、韓国古典詩歌論、韓国語情報の電算処理、韓国語方言学、韓国語学史、韓国語意味論、韓国口碑文学論、韓国現代小説講読、韓国漢文古典講読、韓国現代文学批評、韓国現代詩講読、韓国の文字、韓国語語彙論、韓国古典文学と文献学

### 2. 中国語中国文学科 Dept. of Chinese Language and Literature

専攻探索教科目	中国の言語と文字、中国の大衆文学、中国現代名作の世界、中国古典文学探索
学部専攻科目	中国文学史、漢文講読、中級中国語、中国歴代詩歌講読、中国語会話作文、中国現代文学講読、中国語学概論、高級中国語、中国語文法、中国現代文学論、中国歴代小説講読、中国詩曲講読、中国戯曲講読、中国文学理論特講、中国歴代散文講読

### 3. 英語英文学科 Dept. of English Language and Literature

専攻探索教科目	英語学入門、英文学序説、英米名作の世界
学部専攻科目	英文法、英語学概論、英文学概観、近代米国の小説、英語の構造、英作文、米国文学概観、英語発達史、シェイクスピア、近代英国小説、英米文学特講、英国詩、現代英国小説、現代米国の小説、英国戯曲、現代英米戯曲、米国の詩、英米文学批評、英米作家研究、英語学特講、応用英語学

4. 仏語仏文学科 Dept. of French Language and Literature

専攻探索教科目	世界の中のフランス語、フランス現代思想と文学、フランス文学と芸術の流れ、フランス人の生と社会
学部専攻科目	視聴覚フランス語演習、フランス文化講読、フランス演劇、フランス語文法と作文、フランス語学概論、フランス啓蒙主義、フランス文学概論、19世紀フランス小説、20世紀フランス小説、フランス語翻訳、フランス詩と想像力、中級フランス語会話、現代フランス文化分析、フランス批評と文化理論、

5. 独語独文学科 Dept. of German Language and Literature

専攻探索教科目	ドイツの言語文学、ドイツ古典探索、ドイツ語圏の文学と思想の流れ、映画で見るドイツ文化
学部専攻科目	独文翻訳演習、ゲルマン語圏の神話と民話、独語学の理解、ドイツ戯曲、ドイツ詩と歌曲、ドイツ小説、独文学と公演芸術、ドイツ語の構造、ドイツ文化批評、独文法と作文、ドイツ語日常会話、現代独文学、ドイツ文化テキスト講読、独語独文学論文執筆法、ドイツ語発表と討論、ドイツ文学理論、ファウスト講読、近代独文学

6. 露語露文学科 Dept. of Russian Language and Literature

専攻探索教科目	ロシア芸術と文化、ロシア文学と思想の流れ、世界の中のロシア語、ロシア文学と映像芸術
学部専攻科目	中級ロシア語、ロシア文学特講、ロシア文学史、ロシア詩と歌、基礎ロシア語会話、ロシア文学概論、ロシア文化批評、高級ロシア語、ロシア語発達史、ロシア文学作家研究、ロシア語学概論、ロシア民俗学、ロシア語学特講、ロシア演劇、ロシア文学特講、ロシア文化批評論

7. 西語西文学科 Dept. of Hispanic Language and Literature

専攻探索教科目	現代ラテンアメリカの大衆文化、スペイン語圏現代文学と映像、スペイン語の世界、スペイン社会と文化
学部専攻科目	スペイン語文法、スペイン文学史、中級スペイン語会話、中南米文学史、中級スペイン語作文、スペイン小説、スペイン詩特講、スペイン語学概論、高級スペイン語会話、中南米小説、中南米詩演習、スペイン戯曲、スペイン語作文演習、スペイン語学演習、中南米文学特講、スペイン語翻訳演習、スペイン文学特講、スペイン語圏映画芸術特講、スペイン語教材研究と指導法、スペイン語教育論

8. 言語学科 Dept. of Linguistics

専攻探索教科目	言語と言語学、言語とコンピュータ、ことばの世界、世界の言語
学部専攻科目	音韻論、満洲語、言語学史、形態論、意味論、歴史比較言語学、通時論、社会言語学、言語調査と分析、心理言語学、特殊言語特講、アルタイ語学、人工語学、コンピュータ言語学、減額演習、応用音声学、日本語の構造、言語と情報処理、言語障害と治療

9. 国史学科 Dept. of Korean History

専攻探索教科目	韓国史を見る観点と資料、20世紀韓国史、韓国史をリードした思想家たち、韓国史と生活文化
学部専攻科目	韓国古代史、韓国近世史、韓国近代史、韓国中世史、韓国古代思想史、韓国対外関係史、韓国史特講、韓国社会経済史、韓国現代史特講、韓国近世思想史、韓国史論文執筆法、韓国史漢文講読、韓国史とマルチメディア、韓国商工業史、韓国史セミナー、韓国科学技術史、韓国中世思想史、韓国史特講、韓国独立運動史、韓国史学史、韓国政治社会史、韓国現代史

10. 東洋史学科 Dept. of Asian History

専攻探索教科目	東洋史学入門、概観日本史、モンゴル世界帝国史、東南アジアの歴史と海上貿易
学部専攻科目	東洋史原典講読、東洋史漢文資料講読、中東社会の伝統と近代、日本国家と文化の形成、日本の封建社会、中央ユーラシアの近代的変貌、中国文明と帝国の形成、民族移動と隋唐世界帝国、伝統中国の思想と宗教、近世ムスリム帝国とその遺産、日本近代国家の成立と展開、東洋史特講、ベトナム史通論、東南アジア近代と帝国主義、士大夫社会の成立と新儒学、紳士と中国社会、東洋史セミナー、伝統中国の歴史認識と歴史叙述、東洋社会経済史、東洋社会研究指導、近代中国の改革と革命、近現代中国の社会と文化

11. 西洋史学科 Dept. of Western History

専攻探索教科目	西洋史を見る視角、史料で見る西洋史、西洋の知的伝統、西洋の近代文化
学部専攻科目	米国史、英国史、ドイツ史、フランス史、ロシア史、西洋の古代文明、西洋中世史、西洋近代史、20世紀前半の歴史、20世紀後半の歴史、英文史料講読、仏文史料講読、独文史料講読、西洋史学史、西洋思想史、歴史の中の女性と女性文化、海洋膨張と近代の形成、西洋地域史特講、西洋史特講、西洋史演習

12. 考古美術学科 Dept. of Archaeology and Art History

専攻探索教科目	考古学の世界、考古学研究の基礎、韓国の美術文化、美術史と視覚文化
学部専攻科目	韓国の先史時代、考古学史、形質人類学、西洋考古学、中国美術史、日本美術史、インド美術史、西洋古代中世美術、ルネサンスとバロック美術、韓国歴史考古学、考古学実習、韓国仏教彫刻史、東洋仏教彫刻史、考古学講読、人類文化と環境、現代考古学特講、博物館学入門、韓国絵画史、東洋絵画史、考古学演習、西洋近現代美術、美術史演習、東洋考古学、美術史研究法、韓国仏教美術、東洋仏教美術、東洋と韓国の陶磁器史、美術史研究理論

13. 哲学科 Dept. of Philosophy

専攻探索教科目	哲学の根本問題、中国とインドの哲学、西洋近代哲学、西洋現代哲学
学部専攻科目	韓国哲学史、記号論理学、哲学教育論、哲学教材研究と指導法、倫理学、社会哲学、中国哲学史、認識論、仏教と禅、諸子百家哲学特講、西洋古代哲学、西洋中世哲学、西洋近代経験主義、西洋近代理想主義、言語哲学、老子と荘子、文化哲学、性理学、東西比較哲学、科学哲学、西洋古代哲学特講、西洋現代哲学特講、心理哲学、社会哲学特講、形而上学、実践倫理学、存在論

14. 宗教学科 Dept. of Religious Studies

専攻探索教科目	世界の宗教、宗教と宗教学、仏教概論、キリスト教概論
学部専攻科目	中国宗教、インド宗教、儒教概論、イスラム教概論、道教概論、宗教学の展開、宗教現象学、宗教哲学、宗教人類学、宗教社会学、韓国民俗宗教、宗教心理学、神話学、韓国のキリスト教、韓国の儒教、比較宗教学、韓国の宗教、韓国仏教、神秘主義、宗教儀礼、古代の宗教、日本の宗教、原始宗教、経典と古典、宗教と科学、現代の宗教

15. 美学科 Dept. of Aesthetics

専攻探索教科目	美学原論、芸術哲学、美学史、東洋芸術論
学部専攻科目	音楽美学、手医術学、造型芸術論、演劇美学、芸術社会学、音楽史論、東洋美学史、美と趣味論、現代英米美学、芸術心理学、美術史論、芸術と天才論、美学と批評哲学、現代ドイツ美学、舞踊美学、美術批評論、東洋芸術思想、現代ドイツ美学演習、映像美学、音楽批評論、韓国芸術思想特講、現代英米美学演習

### (3) 学事事項

単位：

1 学期 15 時間以上の講義を 1 単位とする。ただし、実験・実習・実技・体育については 30 時間以上で 1 単位とする。

成績評価：

出席状況、試験成績、再評価、学習態度などを勘案して評価する。

卒業資格

130 単位以上（内教養科目 36 単位以上、専攻科目 42 単位以上）

卒業論文

所定の教養および専攻科目を履修

### (4) 人文学部特性化プログラム

目的：21 世紀知識基盤社会人材養成のための人文学教育の革新

#### 1. 創意性開発小単位教育プログラム

- ・小グループ古典原典講読プログラム

5 名以内

2005 年度から卒業必修科目

- ・小グループ特活セミナープログラム

学生が主題を自主選択して教員の指導を受ける、10 名以内

- ・独立課題研究プログラム

- ・卒業論文指導プログラム

テーマ選択から発表まで、論文作成の全過程を指導

- ・チューター学習指導プログラム

#### 2. 学際的教育プログラム

- ・協同講義プログラム

- ・連合専攻プログラム

#### 3. 人文学教育情報化

- ・E-CLASS コンテンツ開発プログラム

- ・デジタル人文学コンテンツ開発プログラム

#### 4. 外国語教育強化プログラム

- ・外国語教科目実習強化プログラム

外国語学科の専攻科目中、読み・聞き・書く関連科目

3 時間は韓国人教授、2 時間は母語話者講師が担当

・外国語キャンププログラム

短期間に外国語能力を向上させ、外国文化を体験することのできる機会

中国語・スペイン語は現地研修

ドイツ語・フランス語・ロシア語は国内研修

5. 進路模索支援プログラム

・進路特性プログラム

・進路メンタリングプログラム

(5) 学生短期海外研修

1. 研修期間：冬休み（12～2月）・夏休み（7～8月）

2. 研修経費支援（最大支援可能金額）

北米：200万ウォン

欧州・ロシア・アフリカ：180万ウォン

南米・豪州：170万ウォン

アジア：150万ウォン

3. 申請資格

- ・ 現地言語による意思疎通可能な者
- ・ 指導教授の推薦
- ・ 総合成績 2.7 以上

3. 選抜方法

- ・ 校務行政室で受け付け。申請書・指導教授の推薦書・成績証明書
- ・ 審査：1次書類審査、2次面接

4. 報告書

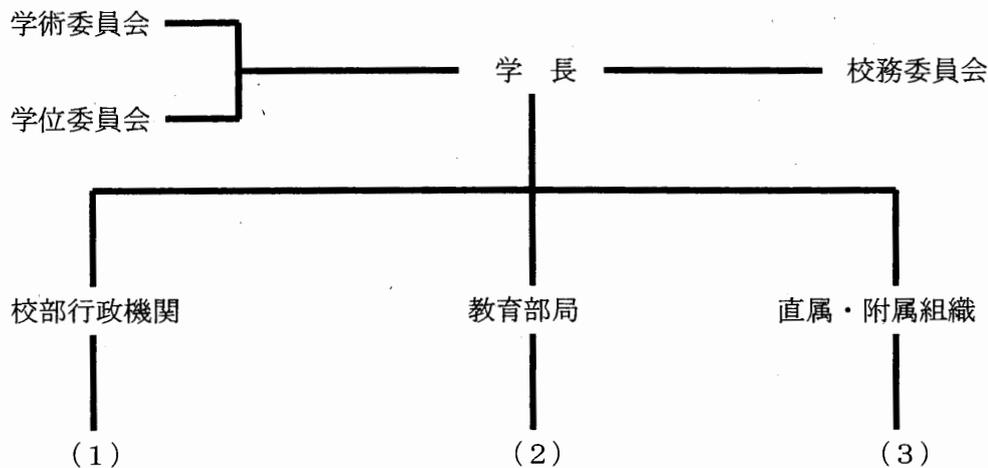
- ・ 研修終了後1ヶ月以内に指導教授の確認を得た後に結果報告書を提出
- ・ 報告書未提出者は研究支援金を返納する

# 北京大学

## 行政機構図と人文学部の概要

(2005～2006年資料に基づく)

### < 1 > 学校行政機構図



※ (1) から (3) には、それぞれ以下の下部組織が設置されている。

(1)	学長室、発展企画部、教務部、科学研究部、社会科学部、大学院生院、継続教育部、人事部、財務部、国際協力部、学生業務部、警備部、総務部、基本建設事業部、資産管理部、実験室・設備管理部、監察室、監査室	
(2)	※各“学部”に属する“学院”および“学系”は、日本の大学の学部または学科規模に相当する。	
	【理学部】	数学科学学院、物理学院、化学・分子工学院、生命科学学院、環境学院、地球・空間科学学院、心理学系
	【情報・工学部】	情報科学技術学院、力学・工学系、計算機科学技術研究所、ソフトウェア・マイコン学院
	【人文学部】	中国語文学系、歴史学系、考古文博学院、哲学系、外国語学院、芸術学系、对外漢語教育学院

	<b>【社会科学部】</b>	国際関係学院、経済学院、光華管理学院、法学院（知的財産権学院を含む）、情報管理系、社会学系、政府管理学院、マルクス主義学院、教育学院、ニュース・メディア学院、人口研究所、中国経済研究センター、体育教育研究部
	<b>【医学部】</b>	基礎医学院、薬学院、公共衛生学院、看護学院、公共教学部、医学インターネット教育学院、第一医院（第一臨床医学院）、人民医院（第二臨床医学院）、第三医院（第三臨床医学院）、口腔医院（口腔医学院）、第六医院（精神衛生研究所）、北京腫瘍医院（臨床腫瘍医院）、深圳医院、首鋼医院、教学医院 12 箇所、研究所・研究センター、学部機関、直属部署
(3)		図書館、公文書館、校史館、計算機センター、会議センター、燕園コミュニティサービスセンター、現代教育技術センター、出版社、燕園街道事務所、校医院、北大附属高等・中等学校、北大附属小学校、成人（継続）教育学院、首都発展研究院、深圳大学院生院

< 2 > 「人文学部」に属する博士・修士学位授与権を有する主な部局、および専門分野  
(抜粋)

哲学関係	哲学系	マルクス主義哲学、中国哲学、外国哲学、論理学、倫理学、美学、宗教学、科学技術哲学
文学関係	中国語中国文学系	文芸学、言語学・応用言語学、漢語言語文字学、中国古典文献学、中国古代文学、中国現当代文学、中国少数民族言語文学、比較文学・世界文学
	外国語学院	英語学英文学、露語露文学、仏語仏文学、独語独文学、日語日文学、インド語インド文学、西語西文学、欧州語欧州文学、アラビア語アラビア文学、アジア・アフリカ語アジア・アフリカ文学、外国語学・応用言語学
	芸術学系	芸術学、美術学、映画学
歴史関係	歴史学系	史学理論・史学史、考古学・博物館学、歴史地理学、歴史文献学（敦煌学・古文字学を含む）、専門史、中国古代史、中国近現代史、世界史

< 3 > 主な教育部局の概要（抜粋）

※以下に挙げる主な部局の概要を抜粋。

中国語言文学系、歴史学系、考古文博学院、哲学系、宗教学系、外国語学院、芸術学系、对外漢語教育学院（以上人文学部）、心理学系（理学部）、社会学系、社会学人類学研究所（以上社会科学部）

### 【中国語言文学系】

- (1) 沿革 1910年 成立
- (2) 教職員数 109名（教授40名、助教授41名）
- (3) 在籍学生数 944名（本科生：351名、修士生：253名、博士生：224名、外国人留学生：116名）
- (4) 設置組織（学科など） 古代文学研究室、現代文学研究室、当代文学研究室、文芸理論研究室、古代漢語研究室、現代漢語研究室、言語学研究室、民間文学研究室、古典文献研究室、比較文学研究所、古典文献研究所、中国言語文学研究所、語文教育研究所、漢語語言学研究所センター、二十世紀中国文化研究センター、中国古文献研究センター、言語学実験室

### 【歴史学系】

- (1) 沿革 1899年 成立
- (2) 教職員数 75名（教授：31名、助教授：20名、兼職教授：4名）
- (3) 在籍学生数 542名（本科生：206名、修士生：187名、博士生：149名）
- (4) 設置組織（学科など） 中国古代史研究室、中国近現代史研究室、世界古代史研究室、欧米近現代史研究室、アジア・アフリカ近現代史研究室、中国古代史研究センター、世界史研究所、欧州研究センター、世界現代化プロセス研究センター、国際婦女問題研究センター、国際関係史研究所、当代企業文化研究所、現代史料研究センター、孫中山国際思想研究センター、東北アジア研究所、中国歴史文化資源研究所

### 【考古文博学院】

- (1) 沿革 1983年 考古学系として成立  
2002年 考古文博学院に改称
- (2) 教職員数 57名（教授：13名、助教授：13名、兼職教授：10名）
- (3) 在籍学生数 198名（本科生：116名、修士生：62名、博士生：20名）
- (4) 設置組織(学科など) 旧石器考古研究室、新石器商周考古研究室、漢唐考古研究室、博物館学研究室、年代測定・文物保護実験室、陶磁器研究所、サックラー考古・芸術博物館

### 【哲学系】

- (1) 沿革 1914 年成立
- (2) 教職員数 教職員：57 名（教授：21 名、助教授：23 名、兼職教授：1 名）
- (3) 在籍学生数 401 名（本科生：159 名、修士生：127 名、博士生：115 名）
- (4) 設置組織（学科など） マルクス主義哲学研究室、中国哲学研究室、外国哲学研究室、美学研究室、論理学研究室、科学技術哲学研究室、倫理学研究室、外国哲学研究所、中国哲学・文化研究所、マルクス主義文庫、儒学研究センター、儒商研究センター、科学伝播センター、人学研究センター、現代科学・哲学研究センター、応用倫理学研究センター

### 【宗教学系】

- (1) 沿革 1995 年成立
- (2) 教職員数 13 名（教授：4 名、助教授：4 名、兼職教授：3 名）
- (3) 在籍学生数 52 名（本科生：20 名、修士生：18 名、博士生：14 名）
- (4) 設置組織(学科など) 仏教・道教やキリスト教・宗教学原理等の各研究室、宗教研究所

### 【外国語学院】

- (1) 沿革 1999 年 6 月、多数の外国語学系を基に成立・発足
- (2) 教職員数 269 名（教授 54 名、助教授 92 名）
- (3) 在籍学生数 1174 名（本科生：705 名、修士生：268 名、博士生 102 名）
- (4) 設置組織（学科など） 英語学科、アジア諸語学科、アラビア語学科、日本語学科、西語学科、仏語学科、独語学科、露語学科、東方学研究院、世界文化研究所、アラビア・イスラム文化研究所、日本文化研究所、インド研究センター、東南アジア研究所、イラン文化研究所、オーストラリア研究センター、カナダ研究センター、英語英文学研究所

### 【芸術学系】

- (1) 沿革 1997 年成立
- (2) 教職員数 26 名（教授：8 名、助教授：10 名、講師：4 名、職員：4 名）
- (3) 在籍学生数 156 名（本科生：96 名、修士生 50 名、  
韓国・台湾・香港出身の学生：19 名）
  - ・番組司会者の副専攻本科：117 名
  - ・同修士院生課程クラス：272 名
  - ・他に芸術学系が管理・指導する芸術団（合唱団、交響楽団、舞踏団、民間音楽団）の人数が約 280 名

(4) 設置組織 (学科など)

- ・本科専攻課程：映画・テレビ脚本監督専攻、芸術学（副）専攻、番組司会（副）専攻、文化芸術管理専攻（現在学生未募集）
- ・修士院生専攻課程：芸術学専攻（音楽学、芸術批評、芸術教育、文化芸術管理など）、映画学専攻（テレビ学、番組司会者など）、美術学専攻
- ・博士院生専攻課程：芸術学専攻（美術学、映画・テレビ学など）

【対外漢語教育学院】

- (1) 沿革 2002年、前身の漢語センターを基に成立・発足
- (2) 教職員数 60名（教授：4名、助教授：22名、講師：24名、助手：2名、行政・教育指導員8名）
- (3) 在籍学生数 大学院生：34名、長期・短期留学生：1000名
- (4) 設置組織 (学科など) 漢語精読研究室、視聴覚・会話研究室、選択教科研究室、予科研究室、HSK（ビジネス中国語）研究開発室、情報資料センター、学院総合事務室

【心理学系】

- (1) 沿革 1926年成立
- (2) 教職員数 42名（教授：10名、助教授：10名、兼職教授：2名）
- (3) 在籍学生数 235名（本科生：128名、修士生：72名、博士生：35名）  
・上記の他、ポストドクターが3名
- (4) 設置組織 心理学研究所

【社会学系、社会学人類学研究所】

- (1) 沿革 社会学系：1982年成立  
社会学人類学研究所：1985年成立
- (2) 教職員数 48名（教授：14名、助教授：17名、兼職教授：2名）
- (3) 在籍学生数 369名（本科生：161名、修士生：127名、博士生：55名、留学生26名）
- (4) 設置組織(学科など) 社会学理論研究室、社会学方法研究室、応用社会学研究室、社会福祉研究室、人類学研究室、都市農村社会発展研究室、民族・人口研究室、文化・メディア研究室

# 北京大学 哲学系・宗教学系 紹介

(2003年資料に基づく)

## < 1 > 学系の沿革と現状

### (1) 沿革

1914年・・・「文科哲学」「文科哲学北京大学門」創立。別名「中国哲学門」。

1919年・・・「哲学系」に改称。

1995年・・・宗教学が哲学や論理学と並立する専攻から独立し、宗教学系として発足。

### (2) 現状

#### ①組織

本科専攻：哲学、哲学（科学技術哲学と論理学）、宗教学

本科副専攻：哲学

研究室：マルクス主義哲学研究室、中国哲学研究室、外国哲学研究室、論理学研究室、倫理学研究室、美学研究室、科学技術哲学研究室、仏教・道教研究室、キリスト教・宗教学原理研究室

#### ②教員・本科生・大学院生などの人数

教員：57名（教授：26名、助教授：27名、講師：4名）

本科生：178名

大学院生：修士生151名、博士生109名（留学生が40名）

## < 2 > 授業科目

※特に明記しない限り、各授業は2単位。上・下に分かれる場合、各2単位。

### (1) 授業科目一覧（太字の授業は内容を後述）

「哲学基礎類」	哲学導論、人文学科導論、人文古典閲読、形而上学、知識論、社会哲学、政治哲学、文化哲学、感情哲学、言語哲学、歴史哲学、経済哲学、管理哲学、芸術哲学、環境哲学
「マルクス主義哲学類」	マルクス主義哲学導論（上）（下）、哲学と現代中国、マルクス主義哲学史、当代中国マルクス主義哲学、マルクス・エンゲルス哲学思想研究、レーニン哲学思想研究、毛沢東哲学思想研究、鄧小平哲学思想研究、マルクス主義文献学、マルクス主義哲学

	特講：現代主義とマルクス主義の比較研究、古典著作研究特講、弁証唯物主義特講、歴史唯物主義特講：人学概論、歴史唯物主義特講：社会発展理論研究、現代マルクス主義哲学特講、現代中国哲学重要問題特講、西洋マルクス主義特講
「中国哲学類」	中国哲学史（上）（下）、中国古代思想世界（上）（下）、老荘哲学、中国現代哲学史、先秦哲学、前後漢哲学、魏晉哲学、南北朝隋唐哲学、宋代哲学、明代哲学、清代哲学、中国哲学特講、儒学哲学特講、儒学哲学特講：現代新儒家、道家哲学特講、道家哲学特講：易学哲学
「外国哲学類」	西洋哲学史、現代西洋哲学、西洋哲学原著選読、東西洋哲学比較、インド哲学、インド哲学原著選読、日本哲学、日本哲学原著選読、韓国哲学、アラビア哲学、アラビア哲学原著選読、哲学外国語シリーズ、ギリシア中世哲学特講：プラトン原著選読、ギリシア中世哲学特講：アリストテレス『倫理学』研究、近代欧州哲学特講：近代哲学、近代欧州哲学特講：啓蒙運動研究、ドイツ古典哲学特講、ロシア哲学特講、現代西洋哲学特講：現代フランス哲学、現代西洋哲学特講：ハイデッガーの『ニーチェ』、現代西洋哲学特講：ハイデッガーの『ヘーゲルの精神現象学』、現象学特講、分析哲学特講
「論理学類」	数理論理（4単位）、論理導論（3単位）、論理と批判性思惟（3単位）、集合論（3単位）、一階述語論理（3単位）、様相論理（3単位）、数理論理特講、哲学論理特講、論理応用特講、数学哲学特講、論理史と論理哲学特講
「倫理学類」	倫理学導論、応用倫理学引論、元倫理学、倫理学古典選読、応用倫理学導論、現代西洋倫理学、比較倫理学、倫理学特講Ⅰ：自由問題研究、倫理学特講Ⅱ：生死問題研究、倫理学特講Ⅲ：倫理学問題研究、倫理学特講Ⅳ：倫理学と文化、応用倫理学特講Ⅰ：企業倫理、中国倫理学史特講、西洋倫理学史特講、当代倫理学特講
「美学類」	美学原理、西洋美学史、芸術と人生、中国美学史、現代中国美学、現代西洋美学、審美心理学、中国美学特講、西洋美学特講、技術美学特講、環境美学特講、部門芸術美学特講、芸術理論と芸術史特講
「科学技術哲学類」	科学通史、科学哲学導論、自然哲学導論、技術哲学導論、科学社会学導論、科学伝播導論、科学と宗教、科学史特講、科学哲学特講Ⅰ：数学哲学、科学哲学特講Ⅱ：物理学哲学、科学哲学特講Ⅲ；生物学哲学、技術哲学特講、科学社会学特講Ⅰ：科学

	知識社会学、科学伝播学特講
「宗教学原理類」	宗教学導論、宗教哲学、宗教社会学、宗教学特講、宗教哲学特講
「キリスト教類」	キリスト教と中国文化、キリスト教史、中国キリスト教史、『聖書』導読、キリスト教特講、ギリシア正教特講、キリスト教原典、ギリシア正教原典
「イスラム教類」	イスラム教史、イスラム教特講、イスラム教原典
「仏教類」	インド仏教史、中国仏教史、仏教特講、仏教原典
「道教類」	道教史、道教特講、道教原典
「宗教現状類」	中国宗教現状、世界宗教現状

(2) 主な授業の内容と成績評価

哲学導論	中国哲学、西洋哲学、マルクス主義哲学の結びつきという角度から、哲学の問題の各側面と哲学思惟の魅力を提示する。
	成績評価；授業中の発言など（20%）、筆記試験（80%）
マルクス主義哲学史	マルクス主義哲学の形成と発展の歴史を理解すると同時にマルクス主義哲学史研究と関連する幾つかの重要な理論と現実の問題を検討することを通して、マルクス主義哲学の基本理論の理解を深める。
	成績評価；平常点（40%）、期末試験（60%）
中国哲学史	中国哲学の発生、発展及びその変遷の基本的な筋道と内容を系統的に理解し、並びに中国哲学の基本内容を把握することを通して、中国哲学の主要な特徴、基本精神、思惟方法を更に踏み込んで理解し、理論的思考力と古代哲学文献を閲読する能力の向上を目指す。
	成績評価；中間レポート（30%）、期末試験（70%）
西洋哲学史	歴史上の主要な西洋哲学者、哲学流派、そして彼らの哲学思想の理解を目指す。哲学系の学生が西洋哲学の原著を更に踏み込んで学習し、全学の学生が西方文化を学習するための基礎を学ぶ。
	成績評価；授業中の討論（30%）、期末試験（70%）

数理論理	記号論理の基本知識と技法を身に付け、論理の哲学思惟における応用を理解し、高度な分析と精密な推論能力を鍛え、後の哲学研究のために必要な基礎を固めることを目的とする。
	成績評価；宿題と平常点（40%）、中間・期末試験（60%）
美学原理	美学という学問分野の基本概念、範疇、命題と理論体系の包括的体系的な把握と、美学史上重要な思想流派と目下美学領域において注目される問題に対する初歩的な理解を目指す。
	成績評価；平常点（30%）、中間レポート（30%）、期末試験（40%）
宗教学導論	宗教学は国際学術界において新興の人文科学と看做されており、その歴史は僅か百余年に過ぎない。特定のテーマの概論と原著の選読を組み合わせ、理論的論述と經典資料という二つの角度から、この新しい学問分野の形成過程、基本問題および学会の最前線で論じられている問題の初歩的な理解を目指す。
	成績評価；書評（20%）、中間レポート（20%）、期末試験（60%）
中国キリスト教史	キリスト教の中国における伝播と発展の歴史を理解し、キリスト教と中国の社会、文化、思想そして宗教との相互影響の基本的状況を把握し、将来の関連領域の研究のために着実な基礎を固めることを目指す。
	成績評価；中間レポート、期末試験
道教史	道教の発生と歴史的発展を講義し、各時代の主要教派を紹介する。道教の宗教体系と歴史的発展に対する包括的体系的な理解を目指す。道教の教義、道団組織そして道教の神々の系統、經典の系統と道教の実践方法に重点を置く。その上で、道教と中国のその他の宗教の関係や道教の中国社会における地位などの方面の知識も紹介する。
	成績評価；平常点、期末試験
イスラム教史	イスラム教の発生、伝播、ムハンマドの一生、『コーラン』と『啓典』の基本内容、そしてイスラム教の基本教義、儀礼などのイスラム教の基本知識の全面的客観的把握を目指す。
	成績評価；平常点とレポート 2, 3 本（40%）、イスラム寺院の見学と授業中の討論各 1 回ずつ（20%）、中間・期末試験（40%）

# University of Oxford

## History of Art

### 1) 全課程を通して

本学科では、絵画的イメージや芸術作品が、過去から現在にかけて文化の伝達に果たした役割を探ることを大きな目標とする。その学習を通して、批評眼・判断力および分析力を養い、さまざまな問題に創造力とオリジナリティをもってアプローチできるようになるよう指導する。授業は大教室でスクリーンなどの画像イメージを用いながら絵画の歴史的解釈などについて講義を行うレクチャー授業、5人から16人の少人数クラスを編成して、研究に関するディスカッション・ライティング能力を養うことを目的とする授業、そして2人の学生を1人の教員が担当して一人一人の関心に対象を絞って指導を行う少人数チュートリアル（3つにわけられる）の3つにわけられる。

### 2) 1年次

1年生の学習は以下の4部構成を取る。

#### 2-1) 世界芸術における美術論（必修）

本講義では、西洋・非西洋の過去と現在における美術作品を研究・分析する。その際、さまざまな社会やその社会における文化背景などによって、いかに多様な美術批評が展開されてきたかを学び、芸術批評と社会との結びつきについて考える。また主にオックスフォード大学付属のアシュモリアン博物館所蔵の芸術品を用い、博物館員や大学外の研究員などを交えて学習を行う。講義はレクチャー形式および少人数クラス授業によって構成される。

#### 2-2) 芸術の変遷：ルネサンスからポストモダニズムまで（必修）

ルネサンスから今日にいたるまでの美術・芸術の歴史についての理解を深めることをねらいとする。特にオックスフォードにおいて一次文献や一次芸術資料が手に入る芸術家や建築家を中心に据えながら、さまざまな時代の芸術・建築様式の変遷についてその歴史的背景とのつながりを考える。講義はレクチャー形式、少人数クラス授業、さらに加えてチュートリアル形式でも行われ、一人一人の学生が自らの興味にそって発表や議論をすることを求められる。

#### 2-3) 古典芸術序論（選択必修）

Classics 学科において行われる3つの選択科目のうちから1つを選んで履修することが求められる。

#### 2-4) オックスフォードにおける芸術、美術、建築（小論文）

指導教官との一対一面接に基づきテーマを決定し、そのテーマに沿った 5,000 words の小論文を作成する。

### 3) 2～3年次

2、3年生の学習は以下の5部構成を取る。

#### 3-1) 歴史学および美術史方法論 (必修)

1年次に学んだ「世界芸術における美術」に基づき構成される本講義は、文献、絵画(イメージ)、芸術作品などを分析するときに必要なとされる歴史学的アプローチやその他さまざまな方法論についての知識をより確固たるものとするをねらいとする。本講義は、レクチャー、少人数クラス、2対1のチュートリアル講義の3つによって構成される。

#### 3-2) 西洋美術論 (選択必修)

歴史学科の選択科目として設定される次の科目群から少なくとも1つを選んで履修する。

- 「カロリング朝ルネサンス」
- 「イタリアン・ルネサンス初期の文化と社会」
- 「15世紀のフランドルとイタリア」
- 「前近代ヨーロッパにおける宮廷文化・絵画」
- 「ヴィクトリア朝イギリスの文化と知」

#### 3-3) 古代、前近代、または非西洋美術 (選択必修)

東洋研究学科、ギリシャ・ローマ古典学科、または考古学・人類学学科の選択科目群の中から少なくとも1つを選んで履修する。例としては以下の通りである。

- 「シチリア、ノルマン王朝の王朝美術と建築」
- 「ルネサンス期のフィレンツェとヴェニスにおける政治、美術、文化」
- 「イギリスバロック建築」等

#### 3-4) 現代芸術 (選択必修)

現代言語学・歴史学科、ラスキン学院、または考古学・人類学学科の選択科目群の中から少なくとも1つを選んで履修する。例としては以下の通りである。

- 「エジプト芸術と建築」
- 「ギリシャ芸術と考古学」
- 「ギリシャ・ローマの壁画」
- 「ローマ帝国統治下での芸術」
- 「ビザンチン文化」等

#### 3-5) 特別科目 (選択必修)

歴史学科によって定められる「歴史と芸術」特別科目群から少なくとも1つを選んで履修する。例としては以下の通りである。

- 「シュール・レアリスム」

「ディドロからゾラまでのフランス文学と美術」等

### 3-6) 卒業論文

以上の授業でつちかった知識と分析力をもとにして、おのおのの指導教官との一対一面接を定期的に行いながら、自らが選んだテーマについて 12000 words の卒業論文を作成する。

## University of Oxford

### Theology

#### 1) 全課程を通して

本学科は、主にキリスト教神学の成り立ちと発展に関する諸問題を研究することを目的とするが、その研究にあわせて、様々な知的分野、宗教的・非宗教的歴史背景などについても考えていく。こうした学際的研究を通して、学生は単に神学的造詣のみならず、歴史学的・哲学的・文学的・言語学的な知識も習得することを期待される。

またオックスフォード大学神学科生の多くは休みの期間を利用してイスラエルへの短期留学をし、考古学的発掘にかかわったり、エルサレムでヘブライ語を学んだり、カレッジの指導教官と共に各地を回る機会を持つことになる。さらに希望する学生にはドイツのボン大学への留学プログラムもある。日常の学生生活は、1週間に4から6コマの講義、1週間に3コマの外国語少人数授業、1週間に1コマの一対一チュートリアル指導におけるエッセイ提出などを中心に成り立つ。

#### 2) 1年次

1年生は以下の科目群から3または4科目を選んで履修する。

「創造に関するキリスト教教義」

「宗教史序説」

「旧約聖書研究」

「新約聖書研究」

「初期教会史」

「哲学序説」

「新約聖書：ギリシャ語」

「旧約聖書：ヘブライ語」

「古代アラビア語」

### 3) 2～3年次

2、3年生は以下の4つの科目を必修科目として履修する。

「旧約聖書の歴史、言葉、神学」

「新約聖書の歴史、言葉、神学」

「初期教会における教義の確立と発展」

「今日までのキリスト教教義の発展」

これにくわえて、さらに以下の3つの科目群から適宜科目を選んで履修する。科目群は複数の講義や少人数指導の組み合わせから成り立つ。

<第1群>

「旧約聖書上級」

「新約聖書上級」

「聖書言語の普及と使用」

などの科目から少なくとも2つを選んで履修。

<第2群>

「キリスト教教義の発展」

「中世初期から現代にかけての宗教史」

「キリスト教の倫理観問題について」

などの科目から2つまたは3つを選んで履修。

<第3群>

「宗教信仰の性質について」の科目を1つ

くわえて世界の4大宗教（イスラム教・仏教・ヒンドゥー教・ユダヤ教）のなかから1つを選んで履修。

<その他>

上の科目群選択に加えて、違う科目群の中からさらに1つか2つの科目を履修すること、もしくはより広い分野から学際的な授業を選んで履修することが求められる。選択科目の例としては以下のようなものがある。

「キリスト教の精神性」

「宗教社会学」

「科学と宗教」

「宗教の心理学」

「聖書の考古学」等

# University of Oxford

## Linguistics with a Modern Language

### 1) 全課程を通して

本学科は、人間言語とその機能に関する理論的な研究と、学生一人一人が選択した特定の言語が持つ構造とその変化にかかわるより明確な問題に関する詳細な研究、とを行うことによりその双方に関する理解をより確かなものとすることを目的とする。この言語学研究と外国語習得の双方を行うコースは、オックスフォード大学が提供するすべての外国語専攻（ただし初級のロシア語、チェコ語、ポーランド語は除く）において可能である。本課程は全部で4年間を要し、そのうちの1年は学生が選んだ言語が実際に話される地域への留学とその地での語学研修に当てられる。4年間の構成としては、最初の1年間で言語学に関する入門的な知識を習得し、その上で次の専門課程へと進学する。2年次と3年次の間の1年間は外国留学にあてられる。

### 2) 1年次

1年生は言語学に関する基礎的な知識を習得するため、次の授業を必修として履修する。

#### 2-1) 「一般言語学概論」

この授業では、現代の言語学理論の発展について共時的視点・通時的視点の双方から考察する。この授業を通して、学生は「意味論」「語用論」「社会言語学」「心理言語学」「言語習得と言語の変化」などについての基礎的な知識を学び、それらに関わる問題点について議論する力を身につけることとなる。指導は、講義形式の授業と、毎回発表またはレポートの提出が求められる少人数チュートリアルとの組み合わせによって構成される。

#### 2-2) 「音声学と音韻論」

発話行為の分析、分類、記録などについての法則を学びながら実践していく。この学習課程においてはすべての言語を対象とするが、特にヨーロッパの諸言語に重点を置くこととなる。指導は講義形式の授業とカレッジをまたいだ少人数クラスによって構成される。

#### 2-3) 「文法分析法序説」

文法理論の諸相について、ヨーロッパ諸言語および非ヨーロッパ言語の別なく考察の対象とする。指導は講義形式の授業とカレッジをまたいだ少人数クラスによって構成される。

### 3) 2年次

2年生は主に選択した外国語の学習を行う。

3-1) 「外国語」: 読解と英訳、ライティング

3-2) 「文学研究」

3-3) 選択科目

言語学、中世文学、言葉の歴史、指定された作家群に関する授業などから選択のこと。

4) 3年次

3年生は、専修する言語が話される地域に留学し、その言語の習得に努める。

5) 4年次

4年次には2年次に選択した外国語科目の上級クラスを履修するなどして学習を継続する。それに加えて、「ヨーロッパ映画」「ラテンアメリカ文学」「女性作家」「カタルーニャ語」「ガリシア語」「アイルランド語」「上級読解フランス語」「上級読解ドイツ語」などの科目群から選択して履修する。

# University of Cambridge

## History of Art

### 1) 全課程を通して

本学科は、芸術および建築一般に関する広範かつ深い知識を得ること、またそれらを批評・分析する力を育成することを目的とする。授業は毎週行われる少人数制講義（チュートリアル）、講義形式の授業、大学外から専門家を招いて定期的に行われる講演会、そしてケンブリッジ大学所蔵の美術品に実際に触れながら行う演習授業、の4つに大きく分かれる。大学3年間のうち、最初の1年は主に入門的な授業を行い、美術史一般、また芸術品の意味や成り立ちについて学ぶ。その際、大学付属のフィッツウィリアム博物館の所蔵品を中心に活用することとなる。続く2年間においてこれらをもとに特定の分野に焦点を絞り、その分野に関する知識と理解を深める。

### 2) 1年次

1年の学生の指導は以下の3部構成をとる。

#### 2-1) 「美術史序説」(必修)

ケンブリッジ大学およびフィッツウィリアム博物館所蔵の美術品を用いて行う講義形式授業。1週間に2回授業を行い、主に西洋美術の歴史（適宜それ以外の地域にも言及する）について学ぶ。

#### 2-2) 「芸術・建築の形成および解釈史」(必修)

この授業では、週に1回の大学外から招かれた専門家による講演と、週に3回の少人数制講義への出席が必要となる。最初の学期（9月から12月）において古代から1600年代までの建築史を扱い、さまざまな建築様式の変遷から、時代の思想や文化的背景がどのように読み取れるかを考える。続く学期（1月から3月）においては中世から近代初期までのヨーロッパ絵画史を中心に扱い、宗教画・非宗教画双方におけるモチーフやその歴史の変遷について考える。最後の学期（4月から6月）においては、1300年から1900年までの絵画史に重点をおき、絵画を描く際のテクニックがどのように変遷したかを学びながら、それらと歴史的・文化的背景とのつながりを探る。

#### 2-3) 小論文作成

それぞれの指導教官との面接の上テーマを決定し、5000 wordsの小論文を作成し、5月中旬（3学期の途中）に提出のこととする。

### 3) 2～3年次

#### 3-1) 「美術史概論」(2年次必修)

この授業では、主にルネサンス期から現代までの美術史を扱う。また適宜美術史批評に必要となる方法論、芸術品保存に関する研究、形式主義批評や社会学的研究についてもふれることとする。

### 3-2) 「芸術受容論」(3年次必修)

この授業では、芸術作品がいかに収集・展示され一般の人々によって受容されてきたかについて学ぶ。1週間に1度の講義授業に加えて2週間に1度の指導教官との面接によって構成され、芸術作品の展示・受容・保存・復興について考える。

### 3-3) 選択科目

以下の8科目の中から2年次には4科目、3年生は2年次に履修した科目と重複しない2科目を選択することが求められる。

#### 1. 「中世前期ヨーロッパ芸術論」

6世紀後半から8世紀終わりまでの芸術を扱い、書かれたテキストとしての宗教と、絵画的イメージとの間の関連やパトロン制などについて学ぶ。

#### 2. 「ティツィアーノ論」

16世紀のヴェネツィア画家ティツィアーノについて、彼の作品のみならずその後世への影響関係について考える。

#### 3. 「キュビズムとその遺産」

第一次世界大戦前後のヨーロッパにおいて起こった芸術運動のキュビズムについてその成り立ちと意味、受容と影響について考える。

#### 4. 「イギリスの建築家とイタリアからの影響：ジョーンズからソーンまで」

17～18世紀にイタリアからの影響で起こったイギリス建築様式の変容について、おもにジョーンズ、ソーンなどに焦点を絞りながら見ていく。

#### 5. 「ローマ：帝国の首都から聖都へ（紀元300年から1300年）」

ローマ帝国の都として、またカトリックの総本山として多大な影響力を持った都ローマを、その都市設計・宗教建築・世俗建築・モザイク・フレスコなどの多角的な視野から見ていく。

#### 6. 「デューラーとその時代」

Northern Renaissanceにおいて中心的役割を果たしたデューラーを、画家・彫刻師・理論家などさまざまな面から考える。

#### 7. 「The Arts and Crafts ムーブメント」

1850年代から第一次大戦期まで、国境を越えてみられた芸術運動である The Arts and Crafts Movement について学ぶ。

#### 8. 「フランス絵画：アンシャン・レジームから第二帝国まで（1770～1855）」

### 3-4) 卒業論文

自ら決めたテーマに沿って、7000-9000 words の卒業論文の作成を行う。

# University of Cambridge

## Theology and Religious Studies

### 1) 全課程を通して

本学科は、聖典研究、人間社会の特定の時代研究、トマス・アクィナスやルター、ヘーゲル、フロイトなどの偉大な思想家の著作研究、またそれらと現代の科学理論とのかかわりについて思索することをねらいとする。それを通して、人類が歴史上、宗教的な信仰を表現するために用いたさまざまな方法、それが後世にあたえた影響、そして神の存在や精神に関する問題などへの洞察を深めることを目的とする。キリスト教神学についての伝統的研究に大きな実績を持つ本学だが、学生はキリスト教神学に焦点を絞ってもよいし、様々な宗教的伝統を比較研究したり論理学や哲学などの側面から神学を研究してもよい。後者のような学際的研究トピックの例としては「インド宗教史」、「初期教会文化」、「ユダヤ教の諸相」、「宗教と科学」などがある。

### 2) 1年次

1年生は次のような授業を通して、宗教学の研究の主たる分野において要求される一般的知識・概念・批評のテクニックなどを身につけることを期待される。

#### 2-1) 必修授業

以下2つの授業は必修であり、すべての学生が履修しなくてはならない。

##### ① 聖典外国語（以下の選択群から1つを選んで履修）

「ヘブライ語初級」

「新訳聖書・ギリシャ語初級」

「コーラン・アラビア語初級」

「サンスクリット語初級」

##### ② 「新約聖書：ベツレヘムからローマへ、ルカによる福音書とキリスト教の発生」

または「旧約聖書：一神教の問題」のどちらかひとつ

#### 2-2) 選択必修授業

上の2つに加えて、以下の選択科目群から3つを選んで履修すること。

##### ① 「キリスト教と文化の変遷」

この講義ではキリスト教の成立と普及、また他の非キリスト教文化との交流において特に重要な時代や問題に焦点をあてて見ていく。

##### ② 「イエス・キリストとは誰か」

この講義ではキリスト教神学についての諸問題を、特にイエス・キリストに的を絞って考えていく。

### ③「現代宗教概論」

この講義では社会学、心理学、人類学などの古典的理論を用いて、宗教理念の構築について考えていく。

### ④「比較宗教論」

ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教、イスラム教などの様々な宗教的伝統に対し、掟や儀式などの側面でそれぞれを比較しあいながら考察する。

### ⑤「宗教および倫理哲学」

形而上学、神の存在についての様々な思想、道德概念の客観性について議論する。

## 3) 2年次

1年次に習得した知識や批評技術に基づき、以下の科目群からみずからの関心に従って4科目を選んで履修する。まず学生は、1年次に履修した聖典外国語の学習を続けるかどうかを選択できる。学習を続ける場合には1年次に履修した外国語の中級レベルを履修することとなるし、この段階で外国語の学習をやめる選択をすることもできる。

それ以外の科目選択肢の例は以下の通りである。

「追放時代（バビロニア捕囚）における文学、歴史、神学」

「ギリシャ・ローマ時代におけるユダヤ教」

「神・自由・精神」

「倫理と信仰」

「心理学と宗教」

「神学と科学」

「イスラム教序説」

「ヒンドゥー教・仏教の生と思想」

「西洋世界におけるキリスト教文化」

「キリスト教史の更新と改変」

「初期教会の信仰と礼拝」等

## 4) 3年次

最終年度において学生は広い選択科目群のなかから4科目を選んで履修する。選択科目群としては外国語科目群、2年次の8つの選択科目群それぞれの上級コース、それらに加えて以下のような学際的な科目群がある。

「ホロコーストに対するユダヤ教とキリスト教の反応」

「世界におけるキリスト教」

「想像力と宗教」

「聖書の諸解釈とその適用」

「身体、精神と社会」等

または、科目選択を一科目分減らして、かわりに論文を提出してもよい。

# University of Cambridge

## Linguistics

### 1) 全課程を通して

本学科は、1年間または2年間の課程である。学生は入学年度に他の一般教養課程を修めたのち、その知識をもとに言語学学科に進学する。言語学研究の魅力は、それが非常に広範な学問分野の方法論や知識を用いて理論化される学問であること、そして従来の学問の境界線を超える力を持つことである。たとえば、言語の意味論研究においてはさまざまな哲学者の思想を参考にし、その一方で音声学研究においては言語学科のラボラトリーにおいてコンピュータ解析を交えながら行うことになる。こうした研究を通して、世界のさまざまな言語において見られる数え切れないほどの違いを記述すること、またこうした一見した違いの裏に、すべての言語が共有する属性があることを明らかにすることを目標とする。この共通する属性を研究することによって、人間の精神の構造に関わる洞察を得ることをもねらいとする。

### 2) 2年間かけて言語学を専攻する場合

#### 2-1) 1年次

1年次には以下の2つの科目のうちから必ず1つを選んで履修し、そのほかに Group B の科目群から3科目を選んで履修する。

必修：①「一般言語学」

②「言語の偏差」

#### 2-2) 2年次

2年次には「言語学理論」を必修科目として履修し、それに加えて Group B の中から3科目を選んで履修する（その際2科目を選択して履修し、それ以外の1科目を卒業論文提出によって代えることもできる）。さらにこれとあわせて Group B または Group C の選択科目群のうちから自由に組み合わせて2科目を選択して履修する。

### 3) 1年間で言語学を専攻する場合

他の課程で2年間の学習を終えたのち言語学専攻に進学するものは、「言語学理論」を必修として履修し、それにくわえて Group B の中から2科目を選んで履修、さらに Group B と Group C の科目群の中から自由に1つを選んで履修する。

### 4) 科目群

#### **Group B**

- ・ 「音声学」
- ・ 「統語論」
- ・ 「意味論と語用論」
- ・ 「音韻論と形態論」
- ・ 「歴史言語学」
- ・ 「英語の構造」
- ・ 「発話コミュニケーションの基礎」

### **Group C**

- ・ 「イタリア語」
- ・ 「ヒスパニックの様々な言語」
- ・ 「ドイツ語の歴史」
- ・ 「フランス語の歴史」
- ・ 「ロシア語の歴史」
- ・ 「現代ギリシャ語の構造の変化」
- ・ 「ロマンス言語」
- ・ 「スラブ系言語」
- ・ 「ドイツ語の歴史・偏差・構造」
- ・ 「ケルトの文献学」
- ・ 「ギリシャ語」
- ・ 「ラテン語」
- ・ 「ゲルマンの諸言語」
- ・ 「実験心理学」

# Durham University

## History

### 1) 全課程を通して

#### 1-1) 学科紹介

ダーラムは実際に歴史がつくられた場なので、歴史を学ぶにはうってつけの場所といえる。中世から現代まで全ての時代の英国・ヨーロッパの歴史に親しむ機会をもつことができる。またヨーロッパ以外の地域の歴史を学ぶことも可能であり、その歴史の政治的な側面と同時に、社会的・経済的・文化的側面をも考察することができる。また1年目で他学部の科目を履修することも可能である。下にあるプログラムをみてコース内容の参考とすること。ただしここにある情報はコースが進むにつれ変更される可能性があることを念頭においてほしい。決定版というよりは、このプログラムの代表的な一例として考えること。

#### 1-2) プログラム編成

- ・ 歴史
- ・ 古代史、中世史、現代史
- ・ 英文学と歴史
- ・ 歴史と政治学
- ・ 現代言語と歴史
- ・ 芸術との複数専攻
- ・ 社会科学との複数専攻
- ・ 教育学・歴史

#### 1-3) コース内容

- ① 1・2年次で、特定の歴史的時代や問題に対するテーマ別アプローチ方法と歴史学的技法を紹介する。本学科の目的は歴史学の射程が、高校 A レベルカリキュラムが通常含んでいる範囲よりもずっと広いことを示すことにある。よって 30 以上の広範囲な選択授業が提供される。学生はこれらから、様々なトピックを選ぶことができる。例えば、「西洋社会もしくはオスマン帝国の誕生」、「マルコ・ポーロの時代のイタリア」、「英国中世の城について」などである。またヨーロッパの宗教改革や大英帝国に焦点をあてることも、パールハーバー以降のアメリカについて学ぶこともできる。
- ② 3年次には、専門家が提示する個々の問題に対してより詳細な研究を行い、経験豊かなスタッフの指導の下で自ら選んだトピックに関する論文を書く。

#### 1-4) 指導、学習、評価

指導方法は多岐にわたるが、通常は講義と対話式のセミナーの混合で進められる。ほとんどのクラスは、試験とコースワークの両方で評価される。

## **Durham University**

### **Theology and Religion**

#### 1) 全課程を通して

神学は哲学、歴史、社会科学という様々な側面を兼ね備えているため、今日の世界をどのように生きるかに関して様々な価値ある洞察を与えてくれる。神学とは、神との関わりにおける人生の本質と目的についての根源的な疑問に関連した広範囲に渡る学問である。ダーラム大学では、この神学と宗教学を真摯かつ大胆に探究するための様々な機会と豊富な授業選択とを提供している。コース内容、プログラム編成については下を参照のこと。ただしここにある情報はコースが進むにつれ変更される可能性があることを念頭においてほしい。決定版というよりは、このプログラムの代表的な一例として考えること。

#### 1-1) プログラム編成

- ・ 神学
- ・ 神学 (欧州学)
- ・ 哲学と神学
- ・ 芸術コースとの併合

#### 1-2) コース内容

ダーラム大学は神学と交わる様々な領域研究を提供している。例えば「旧約・新約聖書の精読」「哲学と倫理学の探究」「キリスト教の伝統に関する通時的・共時的研究」「宗教的实践や神学的伝統に基づいた人類学および社会学といった社会科学の方法論」などである。1年次は「旧約・新約聖書」「宗教と倫理の哲学」「宗教学」「教会の歴史およびキリスト教教義」に関する知識とスキルを身につける。2年次以降は、これら全ての分野における知識を広げてもよいし、自分の興味に基づいて1~2個の分野に絞って専門性を深めてもいい。最終年次に、自分が最も興味を惹かれたトピックを選び、論文を提出すること。

#### 1-3) 指導、学習、評価

全てのプログラムの指導法は、多様な手段と方法による。

- ・ より詳細な研究のための情報を提供する大教室での講義

- ・ 10人前後のディスカッション・生徒主導のプレゼンテーションをするセミナー
- ・ 言語や最終年次の専門トピックに関する特別科目用の小クラス
- ・ チューターとのミーティング

評価方法も多様である。1年次は3時間にわたる筆記試験で評価される。2年次は大半がコースワークと試験の両方で評価される。3年次は、必修の論文とそれ以外の4つの単位が試験によって課され、それらをもとに評価が決定する。

## Durham University

### English Studies

#### 1) 全課程を通して

##### 1-1) 学科紹介

アングロサクソン叙事詩から、ルネサンスドラマ、恋愛詩、現代小説まで、英文学は豊富かつ多岐にわたる研究対象を持った学問分野である。ダーラムでは、英文学を単一専攻課程として、もしくは哲学や歴史との複数専攻課程として学ぶことができる。また複合課程のなかで英文学を受講すること、英文学とともに教育学を学ぶことなども可能である。どの課程を選ぶ学生に対しても、英文学科の目的は、文学のなかに息づく興味深さを探究することにある。つまり全てのコースは、学生が方法論と専門知識の双方を身につけることができるよう設計されている。下記のプログラムはコースの一例である。ただしここにある情報はコースが進むにつれ変更される可能性があることを念頭においてほしい。決定版というよりは、このプログラムの代表的な一例として考えること。

- ・ 英文学
- ・ 英文学と歴史
- ・ 英文学と哲学
- ・ 教育学・英文学
- ・ 芸術との複数専攻

英文学科は、強力な研究姿勢、卓越した出版記録、長年にわたる継続的な学生指導力などのすべてを兼ね備えている。本学科の研究成果はRAEで最も高い5と評価され、指導力はTQAEでExcellentと評価された。教員の専門分野は、文学への多様な批評方法論およびアングロサクソンから現代小説までの英文学全範囲に及ぶ。北東部文芸研究員が、クリエイティブ・ライティング指導のために2週間に1回授業を行う。過去の研究

員には劇作家のエドワード・ボンドや詩人のトニー・ハリソン、アン・スティーブンソンらがいる。

### 1-2) コース内容

①単一専攻課程1年次は3つの必修単位がある。

- ・ 「英国戯曲概論」(20世紀のテキストを使用)
- ・ 「英詩概論」(17世紀のテキストを使用)
- ・ 「英国小説概論」(18世紀から20世紀のテキストを使用)
- ・ その他の科目: 英文学における古代ギリシア・ローマや聖書を背景にしたテーマ、ジャンルに関する概論コース、英語とその歴史(英語の歴史的側面と現代批評方法両方を含む)に関するコース、中世の騎士道時代のテキストに関するコース、初期の英雄文学の理解を深める英雄時代に関するコースなど。

・ 英文学を単一専攻課程にしている者は、1年目に4~6単位をとることが必要である。

②2~3年次は、英文学の伝統的な枠組みを学ぶ一方で特殊なトピックや興味のあるテーマを学んでいくことができる。2年間で12単位をとらなければならない。単一専攻課程の者は下の3つが必修である。

- ・ 「文学批評の理論と実践」
- ・ 「シェイクスピア」
- ・ 3年次修了のための論文

2年目のうちに最低1単位はとること。しかし12単位中2単位は、他学部の単位から選択することもできる。またこの2年の間に、アーサー王伝説から戦後詩までの幅広い主題から、3つの専門トピックを選ぶことができる。

### 1-3) 指導、学習、評価

英文学科の全てのコースにおける指導法は多様な手段と方法による。

- ・ 20-300人の学生を対象とした基礎学習のための講義
- ・ プレゼンテーションやディスカッションをする20人までのセミナー
- ・ 個人指導のための小さなグループ授業
- ・ 自分で選んだ主題に関する8000 words前後の論文(3年次に提出)

成績評価は主に、講義を中心としたクラスにおける3時間の試験、セミナー中心の授業内での2つの長文エッセイ、8000 words 論文の3つによる。

# University of Edinburgh

## History of Art

### 1) 全課程を通して

<なぜエディンバラ大学の美術史を選ぶのか？>

- ・ 1880年、エディンバラで英国初の美術史教授職が設立され、それ以降この分野で中心的役割を果たしている。
- ・ 本学科は世界規模のギャラリーや美術館のある都市にあり、国際的に認められた学者による指導を提供できる。
- ・ 西洋・中東・東洋の芸術を含む広範囲の専門知識を得ることができる。
- ・ 多様な複数専攻が可能であり、また海外留学の機会も与えられる。
- ・ エディンバラという都市とその周囲の田園は、美術研究家にとって非常に刺激的な場所である。
- ・ 2005年 *Sunday Times* での調査によると、エディンバラ大学は芸術とデザインにおいて最高ランクに位置づけられている。

### 1-1) 学科紹介

美術史は、最も多様な種類の美術に対して歴史的研究を行うものである。それらは絵画・ポスター・壮大な公的装飾・彫刻・写真・印刷物などである。どのように、また誰によって、そして何故それらの特別な作品は作られたのか。その作品の意味と解釈に関する疑問は多い。その作品の制作時に人々はどのようにそれらを理解していたか、また時を経てその解釈はどのように変化していったのか。こうした点で美術史は、歴史、文学理論、社会人類学などの他分野とも深いつながりをもっている。5年に延長される美術専攻コース (Fine Art) は、アトリエ実践に美術史の研究も加えられている。この刺激的なプログラムのために、本学科はエディンバラ芸術大学と協力している。

### 1-2) コース内容

- ・ 「アラビア語と美術史」
- ・ 「美術 (5年コース)」
- ・ 「フランス語と美術史」
- ・ 「ドイツ語と美術史」
- ・ 「歴史と美術史」
- ・ 「美術史」
- ・ 「美術史と建築の歴史」
- ・ 「美術史と中国研究」

- ・ 「美術史と英文学」
- ・ 「美術史と音楽の歴史」
- ・ 「古典文学と社会科学」
- ・ 「イタリア語と美術史」
- ・ 「ロシア語と美術史」
- ・ 「スカンジナビア研究と美術史」
- ・ 「スペイン語と美術史」

## University of Edinburgh

### Religious Studies and Divinity

#### 1) 全課程を通して

<なぜエディンバラ大学の宗教学を選ぶのか？>

- ・ 英国で最大の神学・宗教学の研究所をもつ大学の1つであり、最近の2つの RAE で5と評価されている。
- ・ 宗教学において、英国で最も包括的かつ柔軟性のあるプログラムを提供している大学の1つである。
- ・ 院生、学部生とも海外からの留学生が数多くいる。
- ・ 世界中の神学に関する文献や原稿の所蔵最大数を誇る大学の1つである。
- ・ 創造的思考と実践において500年の歴史をもつ大学である。

#### 1-1) コース紹介

宗教は人間の生活に意味を与え、良くも悪くも人間の活動・芸術・社会・政治に影響を与えてきた。エディンバラ大学では、人間的・文化的な現象として宗教を学び、関連する様々な領域（哲学、現象学、社会学、人類学）の方法論も研究する。神学では特にキリスト教に焦点をあてる。聖書の言語・主題・文脈に取り組むことによって、キリスト教の原点に目を向けていくこととなる。またキリスト教の歴史的発展と世界規模での広がり、その神学的・倫理的テーマと問題点、キリスト教と哲学との関連、現在のキリスト教の状況と他宗教とのつながりなども見ていく。

#### 1-2) コース内容

- ・ 「神学」
- ・ 「神学と教会研究」

- ・ 「宗教学」

## University of Edinburgh

### Linguistics

#### 1) 全課程を通して

<なぜエディンバラ大学の言語学を選ぶのか？>

- ・ エディンバラ大学には欧州の言語学者が最大規模で集結している。
- ・ 本学科は、スコットランドで唯一言語学の修士号を提供している大学である。また言語学と情報科学とを関連させた学位を提供している数少ない大学のうちの1つでもある。
- ・ 最新のRAEで5と評価され、言語学の分野で国内最高の大学の1つとされている。
- ・ 3年次に海外の提携大学に留学可能である。

#### 1-1) 学科紹介

言語学とは、私たち人間を人間たらしめている本質的要素である言語を研究する学問である。本学科ではどのように言語が成立し、時代を超えて変化したか、また子どもはどのようにそれを習得するのか、について研究していく。また言語に表現力を与えている音声、文節そして意味の優美かつ秩序だった構成を探究する。人はいかにして日常生活で考えを伝え、関係性を築くために言葉の力を使っているか、にも焦点をあてる。

この学問は複数の学科と関連しているので、学生は広範囲の知識と技術を習得する機会を得ることができる。

#### 1-2) コース内容

- ・ 「人工知能と心理学」
- ・ 「ケルト語と言語学」
- ・ 「中国語と言語学」
- ・ 「ローマ・ギリシア語と言語学」
- ・ 「認知科学」
- ・ 「コンピュータ言語学」
- ・ 「英語と言語学」
- ・ 「フランス語と言語学」
- ・ 「ドイツ語と言語学」
- ・ 「古典文学と言語学」

- 「イタリア語と言語学」
- 「日本語と言語学」
- 「言語学」
- 「言語学と現代言語」

# Yale University

## History of Art

### 1) 全課程を通して

美術史は美術と全ての時代の芸術・建築とを学ぶ学問である。美術史学科のプログラムは人文科学の通常プログラムであり、より専門的な研究の基礎ともなる。特別な指示がない限り、イエール大学のすべての学生は美術史学科のコースを履修できる。

### 1-1) 履修要項

全ての専攻の学生は 100 か 200 レベルのコースを 2 つ受講することが望ましく、少なくとも必修として 1 つは受講する必要がある。それらのコースはヨーロッパ、アメリカ、アメリカ先住民、アフリカ、アジアの伝統の入門的概論などである。将来的に自分の専攻となるだろうと思われる領域に関しては、これら 2 つの概論を早い時期に履修することをすすめる。美術史の上級プレースメントテストを受けた学生は追加単位をもらえる可能性があるので、学部長と相談すること。またこれらの学生は、美術史のセミナーを 2 つ受講することを要求される。それらのセミナーは 402 から 497 番の上級コースで、登録者数に限りがある。中級コースは通常講義のコースで、200 から 399 番。すべての学生は少なくとも 200、300、400 代レベルのコースを以下の 4 分野の中からそれぞれ受講しなくてはならない。

- ① アフリカ、イスラム、アフリカン・アメリカン、ネイティブ・アメリカン、アメリカ先住民、アジア
- ② 古代と中世
- ③ ルネッサンス、バロック、18 世紀
- ④ 19、20 世紀のヨーロッパ、アメリカ

・希望する学生は、アフリカ、アジア、アメリカ先住民の伝統の中で、別の区分を学ぶこともできる。美術史を専攻する者は、認定された専攻領域の提供するスタジオ・アートでのコースを 4 年次の春学期か秋学期に 1 つ以上取ることが望ましい。

・卒業するには、学生は美術史の単位を 12 単位以上取得していなければならない。特別な場合には 12 単位のうち 2 つは他の学科で取得してもよい。通常、他学科のコースは美術史研究に密接に関連していることが望ましい。例えば考古学、宗教史、美学やヴィジュアル・カルチャーなどである。

・また美術史学科の学生は、外国語を履修する必要がある。学生で大学院進学を考えている者は、ドイツ語・フランス語・イタリア語のいずれかを選択すること。

・シニア・エッセイ (卒業レポート) : 卒業レポートとなるのは通常 1 学期中に書かれ

たリサーチペーパーである。学生は以前のコースで行ったリサーチに関連するトピックを自分で選ぶこと。レポートは前学期のうちに担当教官との面談できちんと計画立てされるのが望ましい。場合によっては、学生は2学期分のレポートを書く許可が下りる。

### 1-2) 授業例

- 「中世の聖堂・今と昔」
- 「西洋美術・ルネッサンスから現代まで」
- 「アメリカの写真：文化史・1939-1971」
- 「美術史への批評的アプローチ」等

## **Yale University**

### **Religious Studies**

#### 1) 全課程を通して

##### 1-1) 宗教学科とは

宗教学研究は宗教的伝統・制度・その文化的実践・宗教テキスト・概念などを様々な角度から探求する学問である。本学科は、宗教的伝統の歴史（西洋、東洋、古代、近代）と過去の文化や現在の出来事の形成にどのように宗教が関連しているかという問題を論じる。特に、様々な種類の宗教文学、神の本質や悪の問題などの倫理的・哲学的問題にも焦点を当てていくこととなる。

宗教学は異なった分野にまたがる学問なので、様々な方法論や学問背景を必要とする。宗教学科のコースは以下3つのカテゴリーに分類される。

グループA：1つ以上の宗教的伝統を扱う一般コース、比較コース、テーマ別コース

グループB：ある特定の宗教的伝統への入門コースや歴史的文脈での聖典への入門コースなどを含む概説科目群

グループC：宗教学における専門的なトピックを扱う入門コースと中級コース。

さらに本学科では、宗教学を専攻する学生に2つのプログラムの選択肢を提供している。

1つは通常のプログラムで、もう1つは卒業論文に密接に関連する他分野の主題と宗教学を組み合わせたプログラムである。両プログラムとも授業の履修と2学期分の卒業論文提出が必要である点に変わりはない。

##### 1-2) 4年間を通して

宗教学科での6学期間のコースはどの専門分野にも共通して必修となる。そのうち1つ

は世界の宗教についてのものでなければならない。他の3つは特定の宗教の歴史的研究、またはテキスト研究。この3つのコースはそれぞれ異なる宗教について扱わなければならない。そして最低1つはユダヤ教・キリスト教・イスラム教のいずれかを、また1つは仏教・ヒンドゥー教のいずれかを選ばなくてはならない。残りの1つは倫理・宗教哲学・神学理論に関するものであること。さらに宗教学へのアプローチについての3年次のセミナーをひとつ履修しなくてはならない。加えて3年次が終る前に、学生はもう1つセミナーを修了しておく必要があり、(先に述べた3年次のセミナーとは別に)このセミナーに関してもリサーチ・ペーパーの提出を要求される。プログラムIを履修する学生は、この選択セミナーを宗教学科の認定科目群から選ばなくてはならない。プログラムIIを履修する学生の場合には、宗教学科の認定科目でもよいし、または学科外の4学期コースの1つから選んでもよい。

## 2) プログラムI (宗教学単一専攻) とプログラムII (他専攻との複合専攻)

### 2-1) プログラムI (通常プログラム)

プログラムIは必修の6コース、2学期間で完成させる卒業論文、4つの選択科目を含む宗教学科の12学期間コース、の3部構成をとる。選択科目は、グループCとDから卒業論文に関連するものを選ぶこと。宗教的現象、文学を探究する他学科の同種のコースでも、学科長の許可があれば専攻科目として認められる。通常、認められるのは2つまでとなる。古代言語に関しても同様である。

### 2-2) プログラムII (宗教学と他の専攻とを組み合わせるプログラム)

プログラムIIでは必修の6コース、2学期間で完成させる卒業論文、学科外の4つの専攻および宗教学科の認定科目群から選択する8学期間コース、の3部構成をとる。他学科のコースは直接的に宗教に関連していなくてもよいが、何の関連性もないものは認められない。それらのコースを通して、学生はある特定の学問分野の方法論的アプローチ、文化的領域、歴史的期間や文学を応用して宗教学のテーマを論じる能力を身につけたうえで、卒業論文にのぞむことができる。組み合わせの例としては、中国史、中国語、中国文学のコース4つと中国仏教についての卒業論文。初期アメリカ史と文学に関するコース4つと植民地のアメリカ宗教についての卒業論文、などがある。プログラムIIを選ぶ学生は、3年次の終りか4年次の最初に学科長の承認を得なくてはならないので、早めに担当教員と相談をしておくのが望ましい。

### 2-3) 両プログラムの最終年次(4年次)に関して

両プログラムの学生は、担当教員の下で卒業論文を書かなくてはならない。通常、論文テーマは4年次になる前に終えたコースの中から選択する。論文は2学期分のコース修了と同等であると見なされるため、4年次の両学期を使って卒業論文の履修が可能である。学生は3年次の間に論文テーマを考え始めるのが望ましい。そして4年次の1学期には、担当教員または学科長に計画書を提出し承認を受けることとする。

卒業論文の評価には、リサーチやライティングの課題、4年次のプレゼンテーションやリサーチについての議論も含まれる。成績で「良」を得るためには、学科長に最低10ページの論文を1学期の最終日までに提出する必要がある。

#### 2-4) 授業例

- 「異教入門」
- 「アメリカの宗教、アメリカの生活」
- 「ニュー・ヘイブンの世界宗教」
- 「比較文化の視点から見る黙示録的宗教」
- 「日本の宗教」
- 「インドの宗教：仏教とジャイナ教」
- 「マハーバーラタ」等

## Yale University

### Linguistics

#### 1) 全課程を通して

##### 1-1) 学科紹介

言語学は異なった学問分野にまたがる学問であり、本学科は音韻学的、文法的、意味論的構造の理解、また記述的、歴史的、実験的言語学に対する様々なアプローチの理解へと学生を導くことを目的としている。また本学科は1～2つの外国語の習得を促すコースワークも含む。専攻する者は、「理論言語学」、比較文法の様々な要素、特定の言語群などに焦点を絞ることになる。

##### 1-2) 4年間を通して

1、2年次に、言語学専攻の為「言語学入門」または「言語と心理」を履修する必要がある。さらに1、2年次の間に最低1つの外国語を履修することも必要である。考古学、コンピュータサイエンス、数学、哲学、心理学、社会学のコースを履修することも後の学習の準備として望ましい選択科目である。

##### 1-3) 履修要領

学生は課程全期間を通して全部で14学期間分のコースを履修することになる。履修の際には以下の規則に注意して選択すること。

1. 言語学学科での6学期間にわたるコース（4年次も含めて）を、110 b以上のレベ

ルで6つのカテゴリーから最低3つを選んで履修する。

2. 2年間の外国語学習（または130レベル以上の文学）、もしくは140レベル以上の国語を履修する。

3. 言語学、外国語、文学から選択した4学期間のコース、または他学科の言語学に関連するコースを履修すること。

4. 最終学年（4年次）にシニア・エッセイ(卒業論文)を提出すること。

#### 1-4) 授業例

「歴史的言語学」

「言語と心理」

「音韻学理論」

「統語論」

「言語学形態論」

「ヨルバ族言語の構造」

「発話と言語の関係」等

# Harvard University

## Art History

### 1) 全課程を通して

4年間の必修授業は12ハーフコースに渡る。選択に関しては以下の規定を守ること。

- a. 入門コース4つ
- b. 個人指導3つ
- c. 専門分野のハーフコース3つ
- d. 専門分野以外の2分野でハーフコース2つ

### 2) コース内容

#### 2-1) 入門コース

何を専門にするか迷っている1年生は、通常少なくとも入門コースのうちの1つを、それが専門の必修科目でなくとも受講することが必要である。

#### 2-2) 個人指導

2年生のチュートリアルはABC評価のグループ指導。専門の学生は美術史の専門分野に関する選択科目群の中から1つを選択する。3年生は2つの個人指導がある。HAA 98arはABC評価の個人指導で、指定の教官との週1回の個人面談がある。通常のレポートやディスカッションの課題は共通の興味に関するものに焦点をあわせる。HAA 98brはABC評価の入門授業で美術史の方法論を学び分析能力を伸ばすことを目的とする。

#### 2-3) 専門分野

学生は専門分野として以下のうち1つを選択する。

アフリカ、中世、ビザンチン様式、中国、ルネッサンス、日本、バロック、ロココ、インド、近代と現代、イスラム、建築史と理論、古代、ラテン・アメリカ、アメリカ先住民

#### 2-4) 専門分野以外

全学生必修の12ハーフコースでは、以下に示すとおり専攻分野以外で3ハーフコースを受講しなければならない。

専攻分野がヨーロッパや北アメリカ美術もしくは建築の場合、1ハーフコースをアジア、イスラム、アフリカ、もしくはラテン・アメリカ、アメリカ先住民から選択すること。逆に専攻分野がアジア、イスラム、アフリカ、ラテン・アメリカ、アメリカ先住民の場合

合、1ハーフコースをヨーロッパやアメリカ美術もしくは建築から選択する。また、専攻分野とは異なる時代に関する2ハーフコースを受講すること。

### 2-5) その他の要件

通常、専門分野には可・不可で評価される研究はない。しかし、学部長はスタジオ・アート、もしくは1年生セミナーでの1ハーフコースを例外とすることがある。美術史、建築史のコースは同学科所属教官によるコア・コース、視覚や環境問題研究、伝統的考古学における総合歴史コース、コア・カリキュラム、人文科学、人類学、アフロ・アメリカン研究からの認定コース、デザインの大学院コースや1年生セミナーなど多岐に渡る。美術史・建築史学科以外の開講科目から美術史、建築史のコースとして受講したものにはすべて学部長の承認が必要となる。

### 2-6) 授業例

「アートの世界：ヴィジュアル・カルチャー研究の視点」

「古代中近東美術入門」

「日本美術入門」

「ローマ彫刻」

「イタリア・ルネッサンス美術」

「グローバル・アート：比較美術史」

「アテネの地形学とモニュメント」等

## Harvard University

### Comparative Study of Religion

#### 1) 全課程を通して

比較宗教学科では、世界の文学・美術・哲学を生み出し、それぞれの時代や地域の道德意識を形成してきた人間の様々な経験について学ぶ。本学科は他の文化的・歴史的・学問的・社会的な現象と相互作用する「宗教」を比較・分析する力を育成する。また聖典・慣習・シンボル・哲学や神学理論などについての知識を得ることにより、世界主要宗教の伝統を貫くいくつかの基本概念への理解を深めることをも目的とする。修了するためには、以下に挙げる一定のスキルを習得しなくてはならない。

① テキストの解釈と読解技術

② 明晰なライティング・スキル (エッセイは2・3年生の個人指導において重要)

### ③ 宗教理論についての近代文学と宗教現象研究の方法論の理解

#### 2) プログラム概要

本学科には以下のような4つのプログラムがある。

プログラムA：2つの宗教伝統に焦点を当てる。

プログラムB：1つの伝統に焦点を当てる。

プログラムC：主要研究として宗教と他専攻を複合させる。

プログラムD：二次的な研究として宗教と他専攻を複合させる。

全てのプログラムは必修である概論コースを中心に組み立てられ、方法論コースや比較コースといった、主要な宗教伝統研究とは別の選択コースを含む。これらの選択コースでは、学生が宗教における多様な現象を比較したり、方法論的アプローチを加えることができるように、分析ツールや他の伝統についての知識を教授することとする。

#### 3) 4年間を通して

- ・必修授業：A～Dのどのプログラムを選ぶかによって異なる（(4)を参照のこと）。
- ・個人指導：A、B、Cは個人指導が必修となる。

2年生：Religion 97、チュートリアルセミナー（1学期）

3年生：Religion 98 a、個人か少人数制のチュートリアル

4年生：プロジェクトとして Capstone Project（研究総括プロジェクト）または Honors Thesis（卒業論文）のどちらかを選択する

論文を書かない学生は上級コース（通常はセミナー）を自分の Capstone コースとして登録する必要がある。どのコースを Capstone コースとするかはアドバイザーや他の教官との話し合いの上決定すること。該当コース修了時において、学生は Capstone project（通常はリサーチ・ペーパー）を完成させる。この種のプロジェクトをもって卒業論文の代わりとする学生は、「優等生」として認められる資格は有するが、さらに上の「特別優等生」として選出される資格はないものとする。

・Honors Thesis（卒業論文）：さらに「特別優等生」候補者のみ必須。Honors thesisを書くための資格を得るには、学生はBプラス以上の成績を維持していなければならない。また Honors thesis を書く学生は最終学年のセミナーにおいて Religion 99a と 99b（2学期分）を履修することが必要である。

#### 4) 各プログラムの必修コース

##### 4-1) プログラムA

①一般：比較、方法論的研究：ハーフコース3つ

Religion 11-20 のうちのハーフコース1つ

Religion 97

他のハーフコース

②伝統Ⅰ：ハーフコース5つ

伝統において重要な特定の時代、文化的、地理学的地域についてのハーフコース4つ  
論文を書く者はその1つとして Religion 99a を選択しなくてはならない。

Religion 98a

③伝統Ⅱ：ハーフコース4つ

伝統において重要な特定の時代、文化的、地理学的地域についてのハーフコース4つ  
論文を書く者はその1つとして Religion 99b を選択しなくてはならない。

4-2) プログラムB

①一般：比較、方法論的研究：ハーフコース4つ

Religion 11-20 のうちのハーフコース1つ

Religion 97

他のハーフコース2つ（通常主要な伝統とは別の伝統を選ぶ）

②主要な伝統：ハーフコース8つ

7つのハーフコース。通常3つは伝統において重要な特定の時代、文化的、地理学的地域について。論文を書く者は、これらのうち2つは Religion 99a と 99b でなくてはならない。

Religion 98

4-3) プログラムC

①一般：比較、方法論的研究：ハーフコース3つ

Religion 11-20 のうちのハーフコース1つ

Religion 97

その他のハーフコース

②主要な伝統：ハーフコース5つ

4つは伝統において重要な特定の時代、文化的、地理学的地域について。論文を書く者はこれらのうち1つは Religion 99a を選択しなくてはならない。

Religion 98a

③第2分野：ハーフコース4つ以上。論文を書く者は、これらのうち1つは Religion 99b。

第2分野において、3年生での個人指導1学期分が通常は必要とされる。

4-4) プログラムD

①一般：比較、方法論的研究：ハーフコース3つ

Religion 11-20 のうちのハーフコース1つか、2年生での個人指導。

他のハーフコース2つ

②主要な伝統：ハーフコース4つ

伝統において重要な特定の時代、文化的、地理学的地域についてのハーフコース4つ

4-5) 授業例

「世界の宗教：多様性と対話」

「比較宗教倫理」

「宗教史における「歴史」の位置付け」等

#### 4-6) 個人指導のトピック例

「神秘主義の比較」

「文学と宗教的経験」

「宗教の現象学」

「ヒンドゥー・ルネッサンス」

「社会理論」等

## Harvard University

### Linguistics

#### 1) 全課程を通して

言語学を専攻する者は以下の3つの中から自らの専門分野を選択することとなる。

①言語学

②言語学と関連する分野

③言語学と心理、脳、行動 (MBB)

3つのプログラム全てに共通して専門教員による個人指導があり、また「統語論」、「音声学」、「歴史的言語学における論証と方法論」などの必修コースのセット履修も必要とされる。

#### <その他の規定>

・プログラム①を選んだ学生は、個人指導ではない必修コースの残りを学科内の上級言語学コースや、他学科の言語学に関連したコースの組み合わせによって代えることも可能である。他学科で提供している言語学に関連するコースの例として、特定の言語の言語学的構造（例：「ジャーマン系言語の歴史」）や言語の算定的、哲学的、心理学的要素（例：「言語の心理学」）が挙げられる。

・プログラム②を選んだ学生は、言語学学科により認定された第2分野の言語学関連コース（例えば人類学、古典、コンピュータサイエンス、心理学など）を組み合わせる履修することができる。

・プログラム③には、さらに3コースからなる必修コースがある（心理、脳、行動科学

における論証と方法論に関する集中コース)。

・プログラム③を選んだ学生は、個人指導でない必修コースの残りを、言語学の、もしくは心理・脳・行動についての上級コースによって代えることも可能である。MBBに関連するコースの例として、哲学科のコース(例:「言語の哲学」)や、心理学科のコース(例:「認知神経心理学」)、コンピュータサイエンス学科のコース(例:「自然言語処理」)などがある。

## 2) すべての専門に共通する必修コース

基本: 14 のハーフコース (個人指導 4 コースを含む)

オナー: 16 のハーフコース (個人指導 6 コースを含む)

1. 「言語学入門」
2. 「統語論入門」
3. 「音声学と音韻論入門」
4. 「言語学的実地方法」
5. 「歴史的言語学入門」もしくは「インド・ヨーロッパ入門」

・これ以外に5つのハーフコースを選択することが必須条件として求められる。

そのうち1つは言語学学科認定の言語学コースであること、または関連する領域の要項に補足としてアステリスクマークのついているコースである必要がある。

・その他の3つのコースは、言語学でも他の言語学に関連する領域のものでもよい。他領域から選択する場合には学科長の認可がいる。

## 3) 個人指導 (2年から4年次にかけて)

グループ・チュートリアルー2年生: 連続2コマの6週間授業のハーフコース (通年)

グループ・チュートリアルー3年生: 2つの6週間授業のハーフコース (冬学期のみ)

チュートリアルー3年生: 夏学期に教官に個別指導を受けるハーフコース

チュートリアルー4年生: 言語学 Honors Thesis に向けて、指導教官からリサーチや執筆の個別指導を受けるコース

・3・4年次のチュートリアルに登録した学生は、担当教官と週2時間以上、個別に会う必要がある。3年次チュートリアルの学生はリサーチペーパーを提出する。

・グループ・チュートリアルでのトピックは年ごとに変化する。学生は興味のある授業を自由に選択できる。学生の選択がレベルに依っていないと学科長が判断した時は、他の授業を考えるよう薦める場合もある。

・4~6つ履修するグループ・チュートリアルのうち、少なくとも1つは音声学、音韻学、1つは統語論、1つは歴史的言語学でなくてはならない。

## 4) 今までのトピック例

(歴史的トピック)

「通時的形態論」

「文章の進化」

「イギリスの古代言語」

(音韻学的トピック)

「ドイツ比較音韻学」

「ペノブスコットと北アルゴンキンの構造」

「類型学の理論と実践」

「接触言語とクレオール」

(統語論的トピック)

「沈黙の統語論」

「名詞句文章処理」

「統語論とディスコースの相互作用」

「日本語と英語の統語論比較」

「イベント構造と構文論」

## 5) 必修言語

基本：1つの言語を2年間標準レベルで学習

オナー：2つの言語を2年間標準レベルで学習

- ・基本コースの学生は1つの外国語の知識を以下のどのようなやり方でもよいので、3年次の終りに示す必要がある。
  - a. 指定言語をネイティブスピーカーレベルまで体得する。
  - b. 2年目の言語コースにおいて、全学期最低でもBを取る。
  - c. ハーヴァードカレッジの言語実力試験に合格する。
  - d. 学科指定の読解テストに合格する。
- ・オナーコースの学生は、さらにもう1つの外国語の知識を指定のコースワークか実力テストでもって、3年次の終りに示す必要がある。2つの言語のうち1つは言語学的研究対象の言語と同一でなくてはならない。(例：フランス語、ドイツ語、ロシア語)

## 6) 成績評定・考査、論文について

### 6-1) 通常のテスト

本学科の学生は3時間の記述式試験を1年次の春の読書期間に受け、合格しなければならない。この試験を3年生の終りに受けても良いという特別な許可は、専攻と関連する領域に必要なコースワークが完了していなければ得られない。

### 6-2) 論文 (オナーコースの学生のみ)

3年次の夏学期に、オナーコースの学生は学科長に承認してもらう為に論文の計画書を

提出する。論文アドバイザーとの3学期間にわたるコースと学科のガイドラインに従って論文を準備し提出する。